

平成28年度 [2016年度]
橿原市文化財調査年報

奈良県橿原市教育委員会
2018年3月

序

橿原市には特別史跡 藤原宮跡をはじめとする多くの遺跡や重要伝統的建造物群保存地区に選定されている今井町など、数多くの文化財が所在します。世界に誇るべき長い歴史と文化が育まれた場所と言えます。

この年報では、平成28年度に行いました遺跡の発掘調査、文化財保護事業、普及啓発事業等の概要を報告いたします。

本書が、市民をはじめ多くの方々に、橿原市の文化財に触れていただく良い機会となれば幸いです。

なお、事業を実施するにあたりまして、ご協力いただきました方々ならびにご指導賜りました関係諸機関及び諸氏には心より感謝申し上げます。

平成30（2018）年3月

橿原市教育委員会

教育長 吉本重男

例 言

1. 本書は、平成 28 年度に奈良県橿原市教育委員会事務局生涯学習部文化財課が実施した、下記事業の概要をまとめたものである。
 - I . 埋蔵文化財発掘調査事業
 - II . 出土遺物保存処理事業
 - III . 文化財諸申請処理業務
 - IV . 普及啓発事業
 - V . 史跡整備事業
 - VI . 指定文化財維持管理事業
 - VII . だんじり保存事業
2. 各事業の調整事務は、竹田正則、濱口和弘、平岩欣太、田原明世、泉岡康子、大北与織が主に行い、他の課員が補佐した。また、I . 埋蔵文化財発掘調査事業、II . 出土遺物保存処理事業については、その担当者を後記文中に記した。
3. I . 埋蔵文化財発掘調査事業（ページ 1 の「平成 28 年度 埋蔵文化財発掘調査一覧表」）のうち、③、⑤、⑦、⑧の各調査、⑩、⑪の試掘・確認調査は、平成 28 年度市内遺跡発掘調査等事業（平成 28 年度国庫補助事業）として実施した。また、II . 出土遺物保存処理事業、V . 史跡整備事業も同補助事業として実施した。
4. I . 埋蔵文化財発掘調査事業にあたっては、株式会社 大和流通経済研究所 代表取締役 田村耕一氏、松村正明氏、福井昭全氏、橿原住宅株式会社 代表取締役 川崎悟氏、有限会社ツジヨシ 代表取締役 辻本吉秋氏、株式会社ジェイテクト 取締役社長 安形哲夫氏、佐々木嘉彦氏、古畑喜義氏、古畑佳子氏から多大なご理解とご協力を賜った。記して感謝の意を表すところである。
5. 事業実施にあたり、次の機関からご指導とご協力を賜った。記して感謝の意を表すところである。
独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所都城発掘調査部、奈良県教育委員会文化財保存課、奈良県立橿原考古学研究所（五十音順）
6. I . 埋蔵文化財発掘調査事業の挿図における座標値は世界測地系座標である。
7. 本書の編集は、課員の協力のもと杉山真由美が行った。

目 次

序

例言・目次

I . 埋蔵文化財発掘調査事業	1
平成 28 年度埋蔵文化財発掘調査一覧表	1
平成 28 年度埋蔵文化財発掘調査地位置図	1
埋蔵文化財発掘調査概要報告	2
新堂遺跡（橿教委 2016 - 1 次）	2
新堂遺跡（橿教委 2016 - 2 次）	10
藤原京右京三条十坊、五井遺跡（橿教委 2016 - 3 次）	18
藤原京右京五条八・九坊、慈明寺遺跡（橿教委 2016 - 4 次）	22
藤原京右京九条十坊（橿教委 2016 - 5 次）	32
一町遺跡（橿教委 2016 - 6 次）	34
藤原京右京北六条十坊、土橋遺跡（橿教委 2016 - 7 次）	44
藤原京右京十条五坊、下ツ道（橿教委 2016 - 8 次）	48
藤原京右京二条七坊	52
藤原京右京三条三坊	53
II . 出土遺物保存処理事業	54
III . 文化財諸申請処理業務	54
IV . 普及啓発事業	54
V . 史跡整備事業	58
VI . 指定文化財維持管理事業	58
VII . だんじり保存事業	58

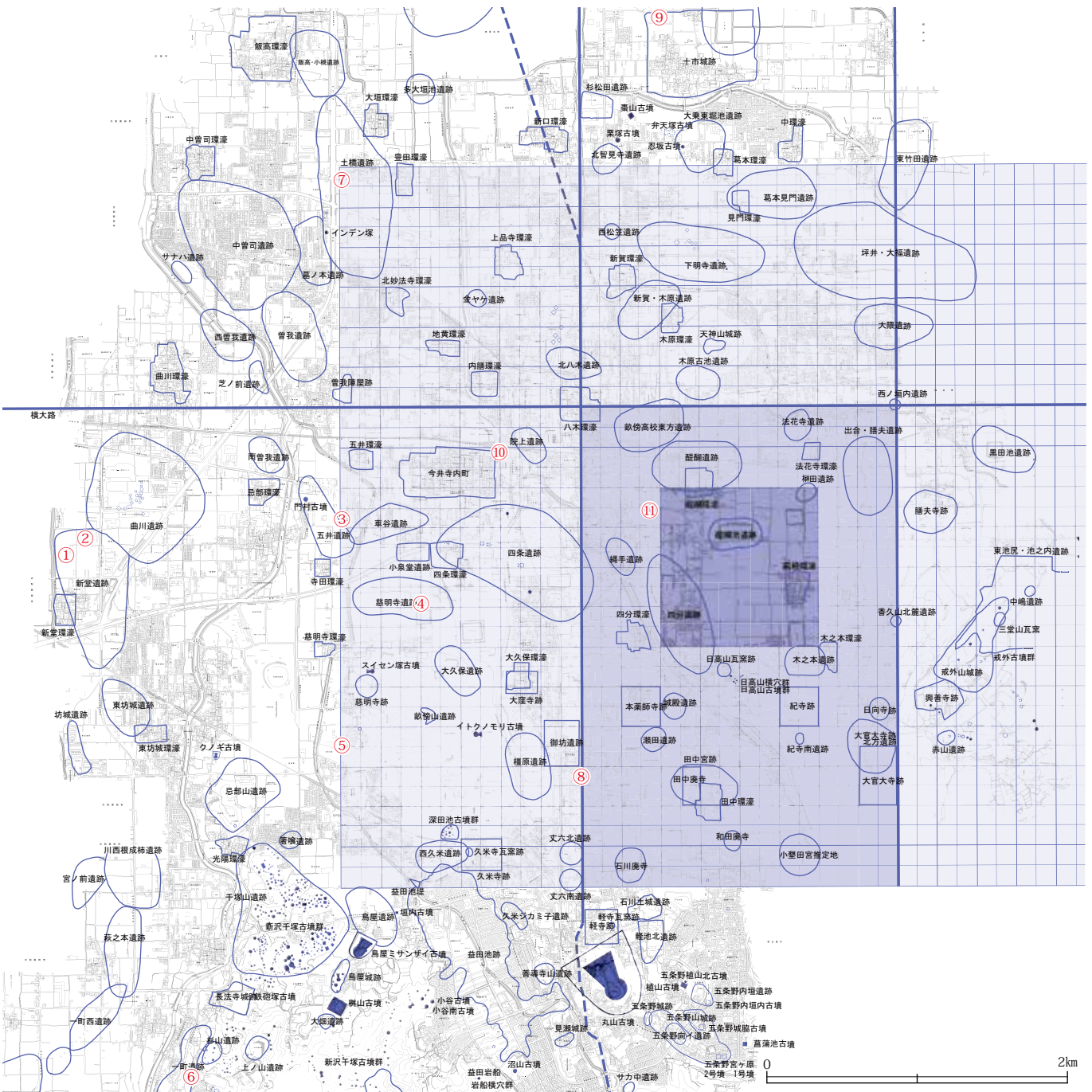
I. 埋蔵文化財発掘調査事業

平成28年度 埋蔵文化財発掘調査一覧表

No.	調査回数	遺跡名	調査地	調査面積	調査期間 (平成)
①	2016 - 1次	新堂遺跡 (2015 - 4次調査から継続)	新堂町233他93筆	3,812.0㎡	27.12.4~28.6.30
②	2016 - 2次	新堂遺跡	新堂町233他93筆	6,971.0㎡	28.5.25~29.2.27
③	2016 - 3次	藤原京右京三条十坊、五井遺跡	五井町237 - 1、260 - 1	165.0㎡	28.6.1~28.6.17
④	2016 - 4次	藤原京右京五条八・九坊、慈明寺遺跡	四条町106	935.0㎡	28.6.27~28.10.21
⑤	2016 - 5次	藤原京右京九条十坊	大谷町92 - 2	66.0㎡	28.11.15~28.11.24
⑥	2016 - 6次	一町遺跡	一町697他10筆	180.8㎡	28.12.8~29.3.10
⑦	2016 - 7次	藤原京右京北六条十坊、土橋遺跡	土橋町82番1他4筆	120.0㎡	29.1.11~29.1.18
⑧	2016 - 8次	藤原京右京十条五坊、下ツ道	御坊町134 - 1他3筆	54.0㎡	29.3.2~29.3.9
⑨	2016 - 9次	十市町遺跡有無試掘確認調査 (本書には未掲載、29年度年報に掲載予定)	十市町258他17筆	1,400.0㎡	29.3.6~29.4.28
⑩	試掘・確認調査	藤原京右京二条七坊	今井町1丁目166番3	10.0㎡	28.7.19
⑪	試掘・確認調査	藤原京右京三条三坊	繩手町417番地	4.0㎡	29.3.10

調査回数は、発掘調査開始順 (一部準拠しないものもある。) に当教育委員会が付したものである。またNo.は下記位置図の数字と対応している。なお、⑩・⑪は国庫補助による試掘・確認調査であり、これには調査回数を付与しない。

また、平成28年4月1日~平成29年3月31日まで、京奈和「大和・御所区間 (橿原市域)」埋蔵文化財調査整理業務を実施した。



平成28年度 埋蔵文化財発掘調査地位位置図 (S=1/40,000)

埋蔵文化財発掘調査概要報告

橿教委 2015 - 4 次・2016 - 1 次

新堂遺跡

調査地 新堂町 233 他 93 筆

調査期間 平成 27 年 12 月 4 日～平成 28 年 6 月 30 日

調査面積 3,812.0 m²

調査原因 商業施設建設

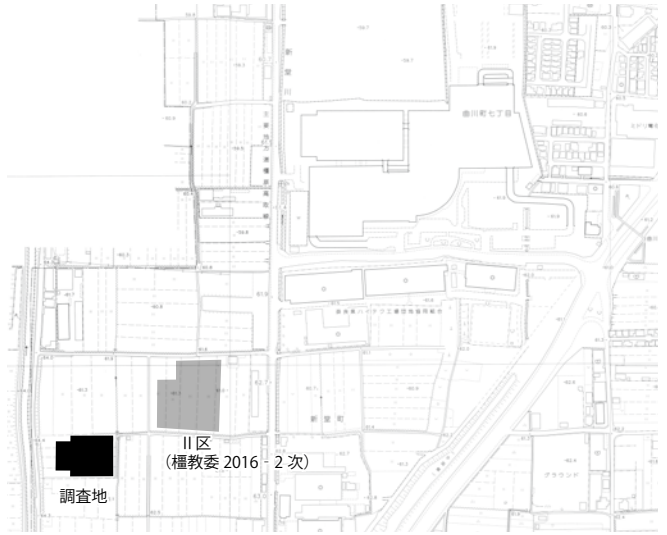


図1 発掘調査地位置図 (S=1/10,000)

1. はじめに

調査地は橿原市の西辺部、新堂町に所在する。イオンモール橿原の南西に位置する現況水田地である。調査地から西方約 50 m の地点には住吉川が北流しており、この住吉川の周辺に橿原市と大和高田市との市境がある。住吉川は調査地から約 1 km 北で葛城川に合流する。

今回の調査は大型の商業施設建設に伴う本発掘調査である。本調査の実施に先立ち、試掘調査（橿教委 2013 - 5 次調査）を実施している。試掘調査時点では調査地一帯は遺跡外であったが、北東に隣接する曲川遺跡と南に隣接する新堂遺跡では縄文時代～古墳時代および中世を中心とする時期の遺構・遺物が多く発見されていることから、遺跡の存在が想定されていた。試掘調査の結果、古墳時代や中世を中心とする遺構・遺物の存在が明らかとなり、調査地一帯は南の新堂遺跡を拡大する形で新たに遺跡の範囲内に含まれることとなった。

その後、試掘成果を踏まえて事業者と協議を重ね、大型建物建設予定地点内の 2ヶ所で記録保存調査を実施することとなった。調査区の名称は建物南西部に設定する調査区を I 区、建物東部に設定する調査区を II 区とし、今回報告する内容は I 区の調査成果である。I 区は調査期間が年度を跨ぐため、2015 - 4 次および 2016-1 次という二つの調査次数を付与している。調査自体に空白期間は無く一連のものとして作業を行っており、調査が終了した平成 28 年度の年報に成果を収録することとなった。なお、II 区の調査は橿教委 2016 - 2 次調査として別に報告を行う。

今回の調査区（I 区）は、試掘調査 8 区を範囲内に含む形で設定している。調査区中央に位置する東西に長い攪乱が試掘 8 区の跡である。試掘 8 区の調査では中世以降の耕作溝、それ以前の時期の溝・足跡群・氾濫跡を検出している。

調査区は大和国条里復元図では葛下郡二十六条一里（字上八ノ坪）に位置する。

2. 調査概要

調査区は西側中央が突出する形状である。調査は遺構面までの掘削を重機で行い、遺構の調査および下層包含層の掘削を人

力中心で行っている。

基本層序は以下の通りである。層序は調査区全体で概ね共通するが、IV 層をはじめとする氾濫層の面的な広がりには地点ごとに細かな差異が存在する。

I 層：耕作土（現代。上面の標高 61.8 ～ 62.0 m）

II 層：灰オリーブ色粘質土・にぶい黄褐色砂質土～微砂（旧耕作土。近世以降の耕作層。II 層底面および層中に氾濫層と考えられる微砂～細砂層を含む）

III 層：灰色粘質土・灰褐色粘質土・にぶい黄灰色砂質土～細砂（中世の耕作層。いわゆる素掘り耕作溝の埋土を含む。上面の標高 61.0 ～ 61.2 m）

IV 層：にぶい黄灰色細砂・灰白色砂（上面が遺構面。調査区の北～西部を中心に分布。古墳時代～中世の氾濫層。厚さ最大 0.1 m。上面の標高 60.8 ～ 61.1 m）

V 層：黒褐色粘質土・褐色砂質土（上面が遺構面。縄文時代晩期遺物包含層。厚さ約 0.15 ～ 0.3 m。上面の標高 60.7 ～ 61.0 m）

VI 層：灰黄褐色粘質土・灰褐色粘土・暗オリーブ褐色砂（地山。遺物を含まない。上面の標高 60.5 ～ 60.7 m）

IV・V 層上面が遺構面である。IV 層が存在する範囲では IV 層上面での調査を終えた後、V 層上面で遺構の確認作業を行っている。IV 層除去時には、その底面において水田跡の存在も想定し確認作業を進めたが、畦畔等の痕跡は存在しなかった。

II・III 層中の一部および IV 層は近隣の河川からの氾濫と考えられる堆積土であり、調査地周辺が度々洪水に見舞われたことがうかがえる。とくに中世以降は氾濫と耕作地の復旧を繰り返していることが土層断面で確認できる。洪水によって堆積した微砂～砂層を耕作土化させているため、耕作層も全体に砂質が強い傾向にある。

遺構ベース層である V 層中には縄文土器および石器が、ごく少量ながら含まれる。V 層下に遺構が存在することも想定されるため、面的な掘り下げを行い平面での遺構の確認を行なった

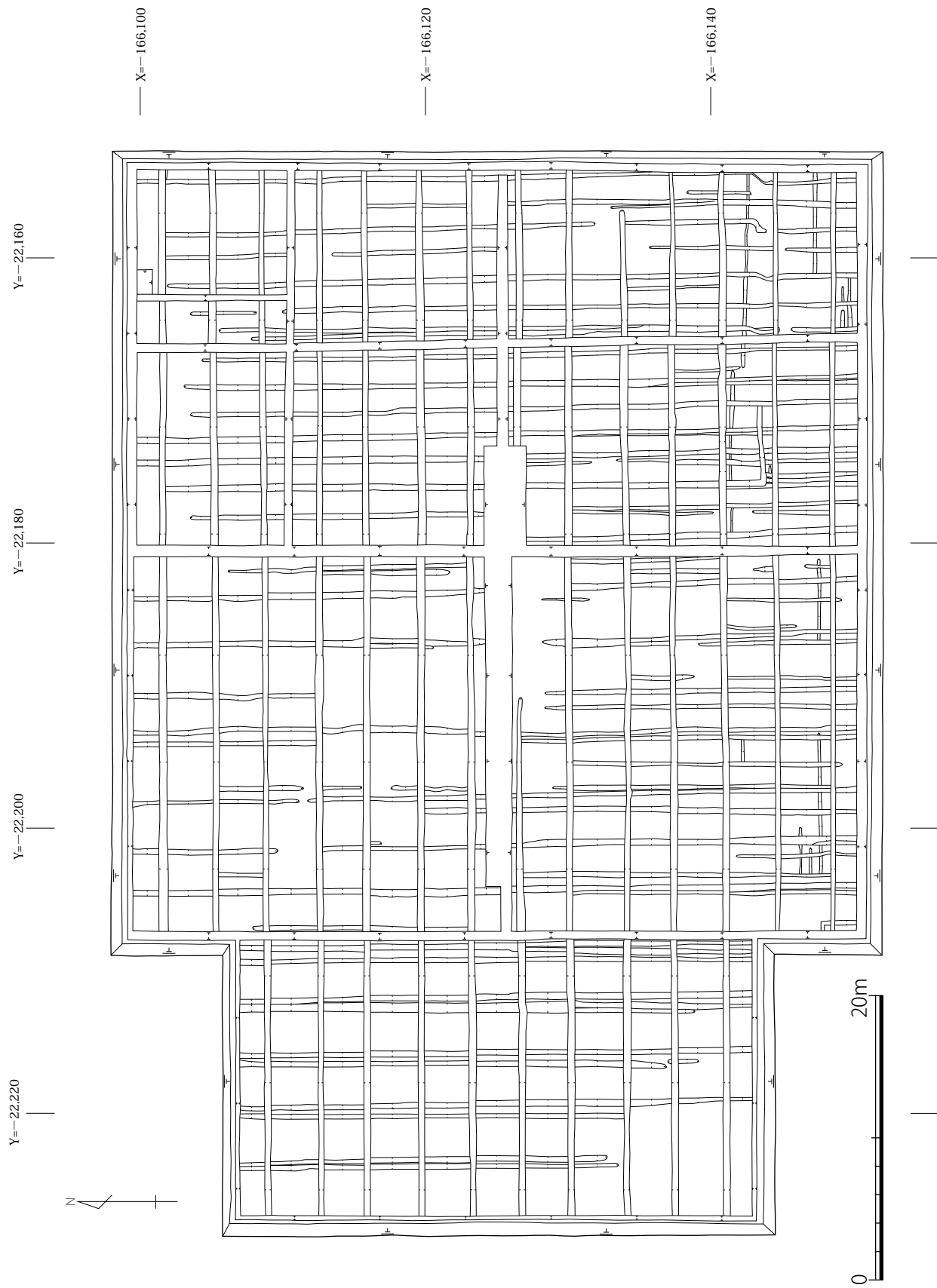


图2 上層遺構平面図 (S=1/400)

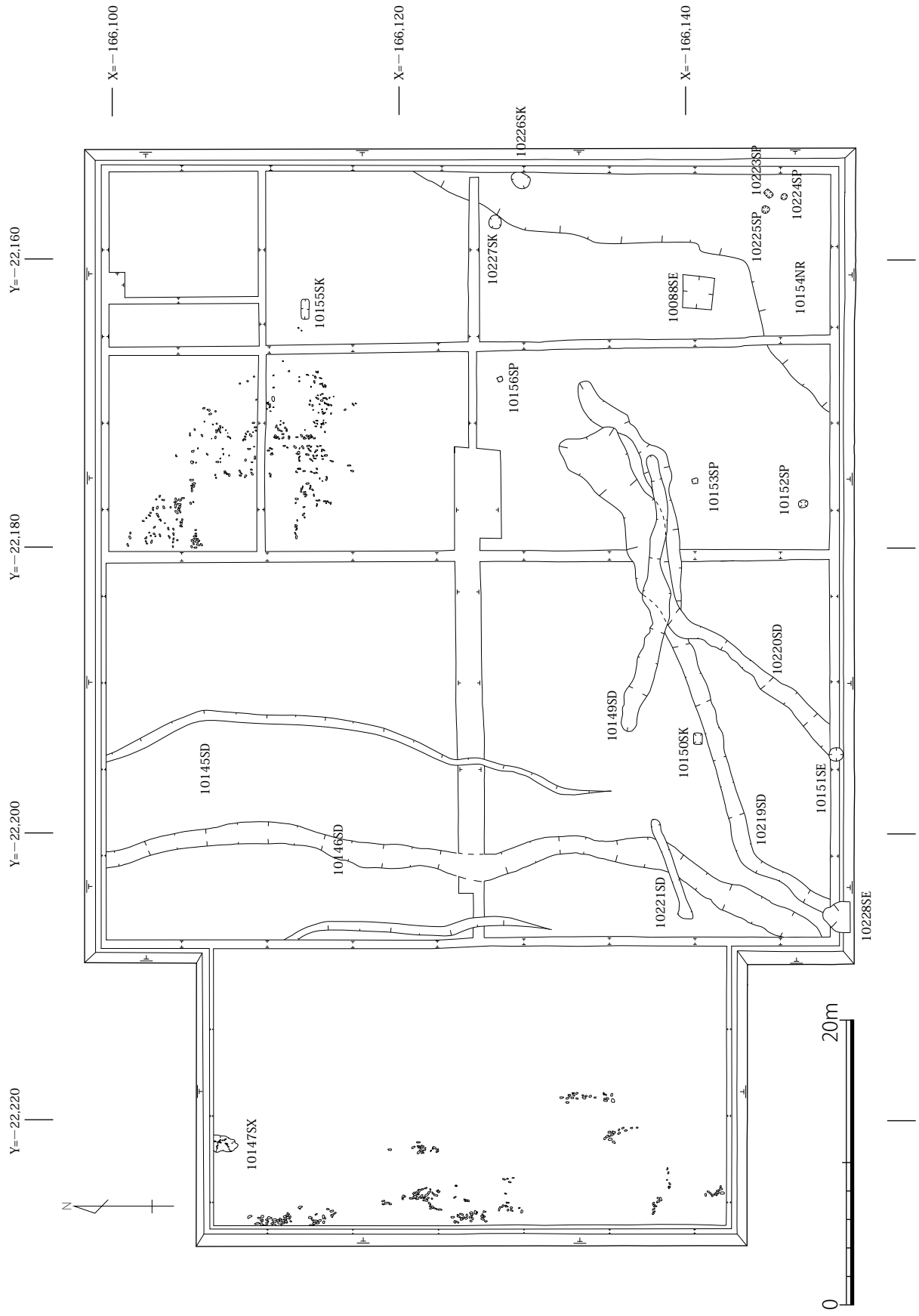


图3 下層遺構平面図 (S=1/400)

が、遺構は存在しなかった。

検出した遺構は上層遺構と下層遺構に大きく分かれる。上層遺構は、いわゆる素掘り耕作溝群であり、いずれもIV層上面およびIII層中から掘り込まれる。時期は中世である。下層遺構は耕作溝群よりも古い遺構を一括したものである。出土遺物が限られるため詳細時期が不明な遺構も多く、弥生時代から中世までの複数時期の遺構が含まれると考えられる。IV層との時期的前後関係が明確な遺構は一部であり、後に個別に述べる。

上層遺構は東西方向および南北方向の耕作溝群である。掘削された時期は基本的に東西方向の溝の方が新しい。調査区全域において約3.0～3.6m間隔で並ぶ東西方向の溝を検出している。いずれも幅約0.25～0.30m・深さ約0.2mを測る溝で埋土は共通する。溝の配置や掘削状況から、これらは一連の大規模な耕作活動によって形成されたものと考えられる。また、南北方向の溝の中にも同様の間隔で並ぶと考えられる一群が見られる。溝の規模はやや小さいものの、これらも東西溝群と同様の耕作活動の痕跡である可能性が考えられる。調査区東半を中心に、これらの溝より古い時期の東西および南北方向の溝も存在する。耕作溝からの出土遺物は少なく、土師器と瓦器が出土している。東西溝からは12世紀代の瓦器塚が出土している。遺物の出土量は調査区の南側ほど多い傾向にある。

下層遺構には井戸、土坑、ピット、溝、足跡群、河道がある。耕作溝よりも古い遺構であるが、詳細時期が不明な遺構も多い。

井戸は3基ある。いずれも土師器の小片が出土したのみであるが、埋土の状況や遺構の重複関係から時期は中世である可能性が考えられる。10088SEは調査区南東部に位置し、平面形は東西約2.1×南北約2.0mの方形である。深さは約0.5mと平面の大きさに比して浅いが、底面付近の微砂層から大量の湧水がある。10151SEと10228SEは調査区南辺西側で検出している。10151SEは直径約1.0m、深さ約0.8mを測る平面円形の井戸である。10228SEは平面形が直径約2.2m以上の不整形円で、深さは1.2m以上を測るが遺構の南半が調査区外にあり、さらに深くなる可能性がある。最後は人為的に埋め戻されている。井戸枠の構造材は出土していない。

土坑・ピットは調査区東～南部に存在する。10155SKおよび10150SKは平面形が長方形を呈する土坑で、埋土が耕作溝と同様のものであることから時期は中世である可能性がある。調査区南東部の土坑・ピットは、10154NRが埋没した古墳時代以降の遺構であると考えられるが、詳細時期は不明である。

溝は6条存在する。10146SDは調査区西半に位置する蛇行溝である。概ね南北方向に伸び、南端は西方へと曲がる可能性がある。幅約1.2～2.0m、深さ約0.3mを測る。溝の断面形は逆台形状が基本であるが、溝の東側斜面中ほどに段が残る部分が見られる。この段の上面や溝底面には一部に鋤跡が残されており、掘削が行なわれたことがうかがえる。自然流路に手を

加えた溝が完全に人工的に掘削された溝であるかは不明である。小片ではあるが、弥生時代～古墳時代前期の土器が出土している。埋土は全体が砂層であり、比較的短時間のうちに埋没したようである。10146SDの北側は埋土の最上層が周辺に溢れ出し、浅い溝状の広がりを見せる。この溝を10145SDとして取り扱っている。10145・10146SDはIV層よりも古い時期の遺構である。井戸・土坑・ピット・溝の中でIV層との時期的前後関係が明確な遺構は10145・10146SDのみである。

10149・10219・10220SDは調査区南部に位置する溝である。重複関係があり、古い方から10219→10220→10149の順に形成されたことが確認できる。10219SDと10220SDは深さ最大約0.5mを測る溝であり、どちらも溝の東端付近は浅くなり、遺構の肩部は不明瞭になる。小片ながら土師質の土器片が出土している。10149SDと10221SDは深さ約0.1mの浅い溝であり、他の溝より新しい遺構である。

調査区全体で足跡群を検出している。とくに集中する地点は調査区西辺沿いと調査区北東部である。調査区北半の足跡群はIV層下に存在することが確認できる。足跡には灰白色系の細砂が詰まる。土器の細片がわずかに出土するが、時期は不明である。人間の足跡と判断されるものが主である。一部に他の動物の足跡である可能性が考えられる小型のくぼみも見られるが、特定は難しい。調査区北西端に位置する10147SXは深さ約0.1mの不整形な落ち込みで、底面に足跡が複数残る。

10154NRは自然河道であると考えられ、その左岸を確認している。深さは約1.5m以上を測る。上層からは少量の土師器や埴輪片が出土している。その他、縄文土器と弥生土器も存在している。これらの表面は摩滅の度合いが強い。最終的に古墳時代に埋没したと考えられる。

3. まとめ

調査の結果、縄文時代以降の遺構・遺物の存在が明らかとなった。縄文時代については晩期を中心とする遺物が河道や遺物包含層から出土しており、調査地の周辺において生活のあったことがうかがえる。詳細な時期は不明であるが、弥生時代から古墳時代にかけての時期には調査地一帯に遺構が形成され始めるようになる。また調査地では、この時期以降、近世に至るまで度重なる河川の氾濫痕跡が認められるようになる。下層遺構・上層遺構に見られる土地利用の在り方が居住地というよりは集落の縁辺部、あるいは耕作地としての利用が想定されるような内容である点は、このような環境に起因すると考えられる。上層遺構の規則的な東西・南北溝群の存在に見られるように、12世紀頃には大規模な耕作活動も行なわれている。その範囲は今回の調査区全体からさらに外側へも広がっており、個人の手では困難な作業だと思われる。調査地周辺の有力者によって大掛かりな手入れが行なわれたのかもしれない。(石坂泰士)



写真1 上層遺構検出状況 - 東から (右奥は二上山) -



写真2 上層遺構検出状況 - 南東から -



写真3 下層遺構検出状況 -南東から-



写真4 調査区南西部 斜行溝検出状況 -東から-

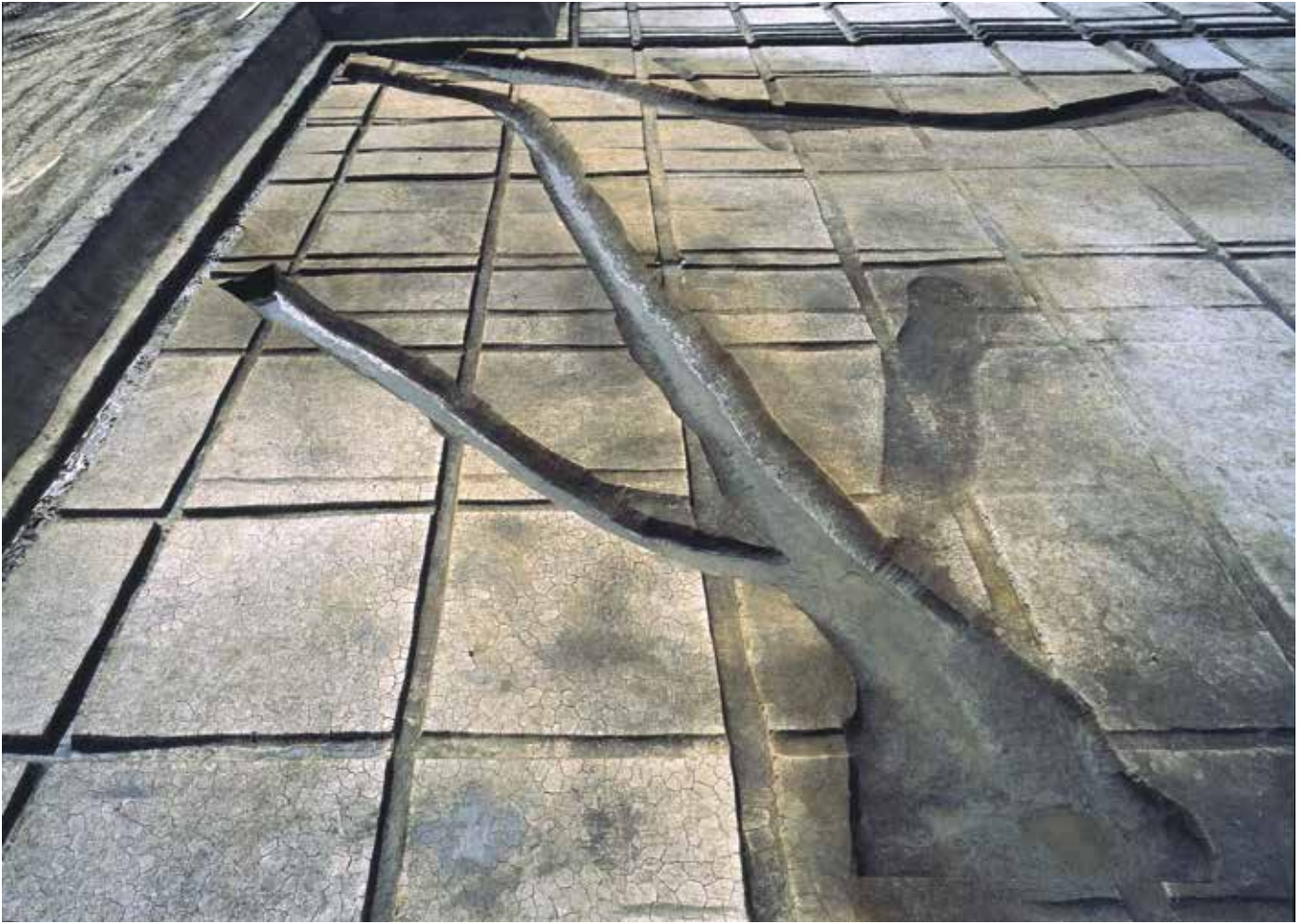


写真5 調査区南西部 斜行溝完掘状況 - 東から -



写真6 下層遺構完掘状況 - 南西から -



写真7 下層遺構完掘状況 -南東から-



写真8 完掘時 航空写真 -南上空から(右奥はⅡ区(榎教委2016-2次))-

新堂遺跡

調査地 新堂町 233 他 93 筆

調査期間 平成 28 年 5 月 25 日～平成 29 年 2 月 27 日

調査面積 6,971.0 m²

調査原因 商業施設建設

1. はじめに

調査地は榎原市の西辺部、新堂町に所在する。イオンモール榎原の南西に位置する現況水田地である。調査地から西方約 150 m の地点には住吉川が北流しており、この住吉川の付近に榎原市と大和高田市との市境がある。住吉川は調査地から約 1km 北で葛城川に合流する。

今回の調査は大型の商業施設建設に伴う本発掘調査である。同事業に基づく本調査を今回の調査地から南西約 100 m の地点においても実施している（Ⅰ区。榎教委 2015 - 4・2016 - 1 次発掘調査。成果の概要は本書に収録）。

本調査の実施に先立ち、試掘調査（榎教委 2013-5 次調査）を実施している。試掘調査時点では調査地一帯は遺跡外であったが、北東に隣接する曲川遺跡と南に隣接する新堂遺跡では縄文時代～古墳時代および中世を中心とする時期の遺構・遺物が多く発見されていることから、遺跡の存在が想定されていた。試掘調査の結果、古墳時代や中世を中心とする遺構・遺物の存在が明らかとなり、調査地一帯は南の新堂遺跡を拡大する形で新たに遺跡の範囲内に含まれることとなった。

その後、試掘成果を踏まえて事業者と協議を重ね、建物建設予定地点内の 2ヶ所（Ⅰ区・Ⅱ区）で記録保存調査を実施することとなった。Ⅱ区の調査については、榎原市教育委員会の依頼により奈良県教育委員会の指導・協力を得て、当市教育委員会と奈良県立榎原考古学研究所による合同調査として実施した。

今回の調査区（Ⅱ区）は試掘調査 3 区を範囲内に含む形で設定している。試掘調査 3 区は今回の調査区中央やや北に位置し、全体が後述する古墳時代河道 20989SD の範囲内に収まる位置関係となっている。

調査区は大和国条里復元図では葛下郡路西二十六条一里（字上野）および葛下郡路西二十六条二里（字五反田）に跨る位置にあり、その境界が調査区中央付近を南北に縦断する。

2. 調査概要

調査は遺構面までの掘削を重機で行い、以後の遺構調査は人力で行なった。下層の断割調査には一部で重機を使用している。

基本層序は以下の通りである。Ⅰ～Ⅲ層については調査区全体で概ね共通する。Ⅳ層については地点によって土質や層厚等

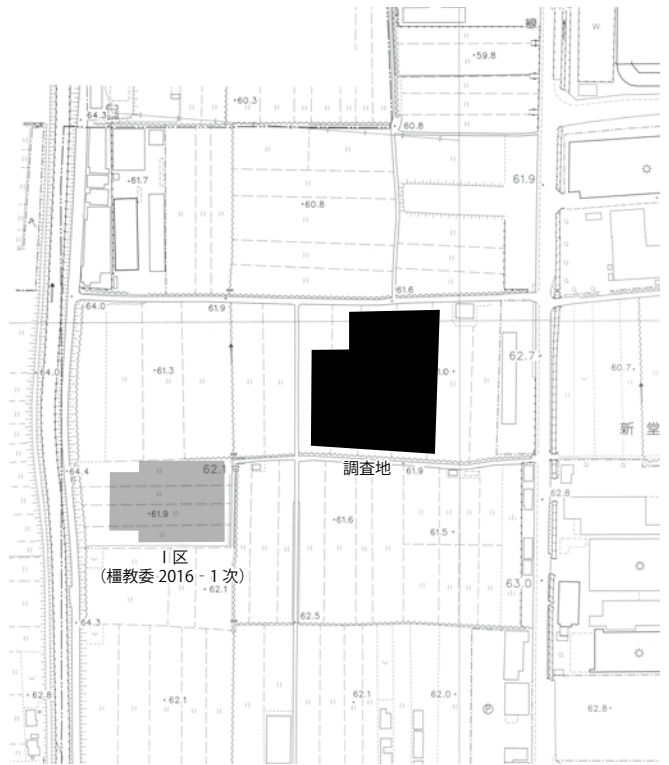


図4 発掘調査地位置図 (S=1/5,000)

が大きく異なるものを一括りにしており、一部は縄文時代の河川堆積層であると考えられる。Ⅲ・Ⅳ層の縄文時代遺物・遺構の詳細な状況については後述する。各層の上面高は周辺の地形と同様、概して南から北に向かって低くなる。東西方向を比較した場合、東側がやや低い傾向にある。

- Ⅰ層：水田耕作土（現代。上面の標高約 61.1～61.4 m）
- Ⅱ層：暗黄灰色粘質土・灰オリーブ色砂質土～粘質土（中世以降の耕作層。上層遺構の耕作溝の埋土も含む。上面の標高 60.8～61.1 m）
- Ⅲ層：褐色粘質土・褐灰色砂質土・橙灰褐色砂質土～砂土（上面が上・中層遺構面。縄文時代遺物包含層。上面の標高 60.2～60.7 m）
- Ⅳ層：にぶい黄灰褐色土・青灰色シルト～粘土・暗褐色粘質土・灰色微砂～砂（上面が下層遺構面（＝にぶい黄灰褐色土のみ）。縄文時代河川堆積層を含む。上面の標高 60.0～60.4 m。砂層は厚さ最大で約 2 m 以上）

遺構は上層遺構・中層遺構・下層遺構に分かれ、時期は上層遺構が中世以降、中層遺構が古墳時代、下層遺構が縄文時代である。Ⅲ層上面が上・中層遺構面、Ⅳ層上面が下層遺構面である。

○上層遺構（中世以降）

上層遺構は中世以降の遺構であり、近世の遺構を含む可能性がある。上層遺構には耕作溝群、ピット、土坑がある。

耕作溝群はいわゆる素掘り耕作溝であり、調査区全域に存在する。耕作溝は南北方向が主であり、東西方向の溝は小規模なものがごく少数存在するのみである。耕作溝からは瓦器や土師器、須恵器が出土するが量は少ない。溝の中には断面台形而他



図5 古墳時代・縄文時代遺構平面図 (S=1/500)

の溝よりやや深いものが数条存在しており、これらは区画溝である可能性もある。埋土や溝の幅に耕作溝と大きな差異は無い。

耕作溝と同時期、あるいはそれより新しい時期のピットが複数存在する。

土坑は耕作溝よりも古い遺構で、合計7基が調査区全体に散らばる形で分布している。いずれも土取り等の目的で掘削されたと考えられ、掘削後すぐに人為的に埋め戻されたようである。平面形は6基が長方形(長辺約1~2m)、1基が不整形(長辺約2m)である。深さは約0.5~1.8mと土坑によって差異が大きい。遺物はほとんど出土していないが、瓦器と土師器の細片がわずかにある。

○中層遺構(古墳時代)

中層遺構の時期は、古墳時代中期とくに中期前半が主である。調査区中央~北側に位置する大規模な河道の両岸側に遺構が存在しており、とくに河道の北~東岸側(調査区北東隅)に多く分布する。遺構は河道、井戸、土坑、溝、ピットがある。

20989SDは幅約15~35m、深さ最大約2.5mを測る河道である。調査区の東から西へと流れ、調査区中央付近で流れを北西方向へと変える。河道北半の東岸寄りの位置に大規模なしがらみ(柵)遺構が構築されている。しがらみ遺構は加工木・自然木・樹皮等の木材を多数組み合わせで構築されており、倒壊した状態で出土しているが、全体の位置は概ね元の場所を保っていると考えられる。しがらみ遺構は20989SD下層に属し、後述する初期須恵器と同時期の遺構と考えられる。

20989SDからは大量の遺物(遺物コンテナ約500箱分。うち約400箱が土器)が出土している。出土遺物は土師器、須恵器、韓式系土器、弥生土器、縄文土器、土製品、鞆羽口、動物骨、木製品、砥石、石器等がある。出土遺物の時期は古墳時代中期前半が大部分を占め、20989SD下層はこの時期に堆積した砂層である。20989SD最上層からは中期後半の土師器・須恵器が出土しており、この時期にほぼ埋没したと考えられる。

20989SD北端付近にはこの時期に属すと考えられる杭列も存在している。

遺物の出土地点は平面的には河道全体に散乱しており、河岸から一括して投棄したような状況は見られない。出土土器の大部分は土師器であるが、いわゆる初期須恵器も多数出土している。初期須恵器の数は調査時に把握できている範囲で個体数にして約70点以上にのぼる。初期須恵器より数は少ないものの韓式系土器や瓦質土器も出土している。中期の土器は遺物表面の状態が良好であり、出土地の周辺で使用されていたことが予想される。

また、前期に遡る土師器や弥生土器、縄文土器も出土しているが、これらは中期の土器と比較して表面の摩滅具合が強い傾向にある。

動物骨のうち動物種が特定できるものに馬があり、歯や肩甲骨が出土している。馬の歯は20989SD内に散乱する形で多数出土している。出土層位から初期須恵器と同時期の資料であると考えられる。木製品はしがらみ遺構の周辺を中心に出土している。その中にはしがらみの構成材として転用されていたものも多く含む。木製品には腰掛、刀形木製品、刀装具、槌、鋤・鍬、槽等がある。

井戸は調査区北東部に3基(20166・20169・20234SE)存在する。20166SEと20169SEは平面形が直径約1.6mの円形、深さ約1.5mを測る素掘りの井戸で、初期須恵器が出土している。20234SEは平面形が直径約2.1mの円形、深さ約1.7mを測り、下半に板材と柱材を組み合わせた井戸枠が残されている。

土坑のうち20154・20156・20202SKは調査区北東部に位置する。20154SKと20156SKは平面形が南北に長い楕円ないし隅丸方形の土坑で、深さ最大約0.15mの浅いすり鉢状を呈する。20202SKは一辺約3.2m、深さ約0.2mを測る隅丸方形の土坑で、土坑底面の中央部と東半に直径約0.4mのピットが存在する。中期の土師器が出土している。20202SKの周囲には9基のピットが存在しており、一連の遺構である可能性もある。

溝は調査区東辺沿いを中心に各所に存在する。全体に出土遺物が少なく、深さ0.2m程度の浅い溝が多い。20419SDは河道南岸に接する位置にあり、南東~北西方向に直線的に伸びる。幅約1.9~3.6m・深さ約0.9mを測る大型の溝で、断面形は底の狭い逆台形を呈する。古墳時代の土師器が出土している。埋没は河道の最終的な埋没よりも先である。調査区北東隅に位置する20196SDからは中期の須恵器が出土しており、溝の北端付近に小規模な杭列が設けられている。20270SDは河道20989SD上面に存在しており、河道埋没の最終段階の堆積である可能性があり、20417SXも同様である。試掘調査3区で検出していた溝状遺構はこれらにあたる。

ピットは河道北岸一帯と南岸東端付近に存在し、とくに前者の範囲に多い。出土遺物が少なく時期が明確なピットは限られるが、他の古墳時代遺構との埋土の共通性から中層遺構としている。小規模なピットが多く、前述の20202SK周囲のものを除くと明確に建物ないし柵と考えられる配置のまともは見出しがたい。

○下層遺構(縄文時代)

上・中層遺構のベース層であるⅢ層中にはごく少量ながら縄文時代の遺物(土器・石器)が含まれており、調査区壁面の土層断面観察と併せて、下層に縄文時代の遺構が存在する可能性が考えられた。そのため、中層遺構の調査と並行して下層遺構の確認作業を進めることとした。Ⅲ層中に遺物の存在が確認で

き、かつ良好な遺構ベース層となりうると考えられる黄灰褐色土が存在する範囲を中心に、下層試掘調査区①～④を設定している。その結果、遺構は小規模な土坑1基とピット2基のみであり、調査区壁面で確認された遺構と思しき土層断面も風倒木痕であることが明らかとなった。遺構および周辺から出土する遺物も微量である。

にぶい黄灰褐色土が存在しない範囲には縄文時代の河川堆積と思われる粘土層や砂層が広がっている。その詳細な状況を確認するため調査区南西部に下層試掘調査区⑤を設定している。また、古墳時代河道 20989SD 壁面～底面においても同様の確認作業を行っている。結果はいずれもごく僅かな縄文土器細片を含むだけであった。

調査地一帯には下層に縄文時代の遺構・遺物が存在するものの、いずれも非常に希薄であり、今回の調査では中層遺構の調査に注力することとした。

3. まとめ

調査の結果、大きく分けて中世以降・古墳時代・縄文時代の遺構・遺物が存在することを確認した。とくに注目されるのは古墳時代である。

河道 20989SD からは古墳時代中期前半を中心とする時期の遺物が大量に出土した。とくに初期須恵器の出土量は奈良県内

でもっとも多く、消費地での出土としては全国的に見ても稀有な例と言える。初期須恵器の特徴とされる多様なバリエーションが見られ、須恵器生産黎明期の試行錯誤がうかがえる。日本列島内での初期須恵器生産地の問題、須恵器生産体制の確立過程や流通の実態、朝鮮半島との具体的な関係性等といった様々な問題を研究する上での貴重な資料となる。また、初期須恵器と同時期と考えられる馬骨が複数出土しており、これも日本列島において馬の本格的利用が開始される時期の資料であり、今後の調査研究が期待される。この他にも土器や木製品等注目すべき遺物が多数存在する。

これまでの新堂遺跡の調査において確認されていた古墳時代の遺構は前期前半と中期後半が中心であったが、新たに中期前半の遺構・遺物が確認されることとなった。今回の調査地から北東約 300 m の地点には曲川古墳群が存在する。前期後半から中期にかけて造営された古墳群である。今回確認された遺構・遺物の時期はまさにこの形成期にあたり、曲川古墳群の造営集団との関係が想起される。なお、新堂遺跡および曲川遺跡における既往の調査において古墳時代中期の明確な住居跡は発見されておらず、今回の調査においても同様である。居住域の所在をはじめ、周辺の土地利用の実態解明については今後の調査成果にも期待がかかる。

(石坂泰士)



写真9 20989SD 出土土器



写真10 中層遺構検出状況 - 南西から -



写真11 中層遺構検出状況 - 北東から -



写真 12 中層遺構完掘状況 - 南東から -



写真 13 調査区北東部 中層遺構完掘状況 - 東北東から -



写真14 20989SD 北西部 しがらみ遺構出土状況 - 南東から -



写真15 20989SD しがらみ遺構北半出土状況 - 南東から -



写真 16 調査地遠景 航空写真 - 北から (中央が調査地) -



写真 17 20989SD しがらみ遺構周辺 土器状況 - 北東から -



写真 18 20989SD しがらみ遺構内 土器出土状況 - 南から -



写真 19 20989SD 出土 刀形木製品



写真 20 20989SD 出土 腰掛

藤原京右京三条十坊、五井遺跡

調査地 五井町 237 - 1、260 - 1

調査期間 平成 28 年 6 月 1 日～平成 28 年 6 月 17 日

調査面積 165.0 m²

調査原因 事務所、倉庫建築

1. はじめに

調査地は高取川左岸に立地し、五井池の北西約 100 m に位置する。

調査地は藤原京の西京極に該当する。藤原京復元条坊の呼称では右京三条十坊西南坪に該当し、敷地のほぼ中央に西十坊大路が通る。また、古墳時代前期の集落跡である五井遺跡の縁辺にあたる。調査地近隣での藤原京期の遺構はあまり明らかではないが、調査地の南東約 300 m の地点で榎原考古学研究所によって実施された四条シナノ遺跡の調査で四条大路と西十坊々間路が確認されている。調査地の西約 50 m の地点で実施した五井遺跡の調査では、古墳時代の集落跡と畠遺構を確認している（榎教委 2010 - 1 次）。

2. 調査の概要

調査地の中央に 125.0 m²（東西 25.0 m × 南北 5.0 m）の調査区を設定したが、西十坊大路の側溝と考えられる遺構の位置が想定より西であった。よって、調査区を西に拡張し、調査区の規模は 165.0 m²（東西 33.0 m × 5.0 m）となった。下記 IV 層上面までを重機で掘削、除去し、遺構の検出等の作業は人力で実施した。

調査区の基本層序は以下の通りである。

I 層：現代造成土（上面の標高 61.9 m）

II 層：緑灰色・黄褐色粘質シルト（耕作土・床土。上面の標高 60.9 m）

III 層：黄灰色粘質シルト（旧耕作土。上面の標高 60.3 m。上面が耕作溝検出面）

IV 層：にぶい黄褐～黒褐色粘質シルト（藤原京期より古い土層。上面の標高 60.0～60.1 m。上面が藤原京期の遺構検出面）

V 層：にぶい黄色極細砂（自然堆積層。上面の標高 59.8～59.9 m。上面が藤原京期より古い時期の遺構検出面）

I 層は現代の造成土である。

II 層からは陶器片が出土し、中世以降の土層と判断できる。

III 層からは瓦器が出土し、古代以降の土層と判断できる。

IV 層以下からは遺物が出土しなかったが、後述の通り IV 層上面で藤原京期の遺構を検出したことから、土層の形成は藤原京期より古い段階と判断できる。

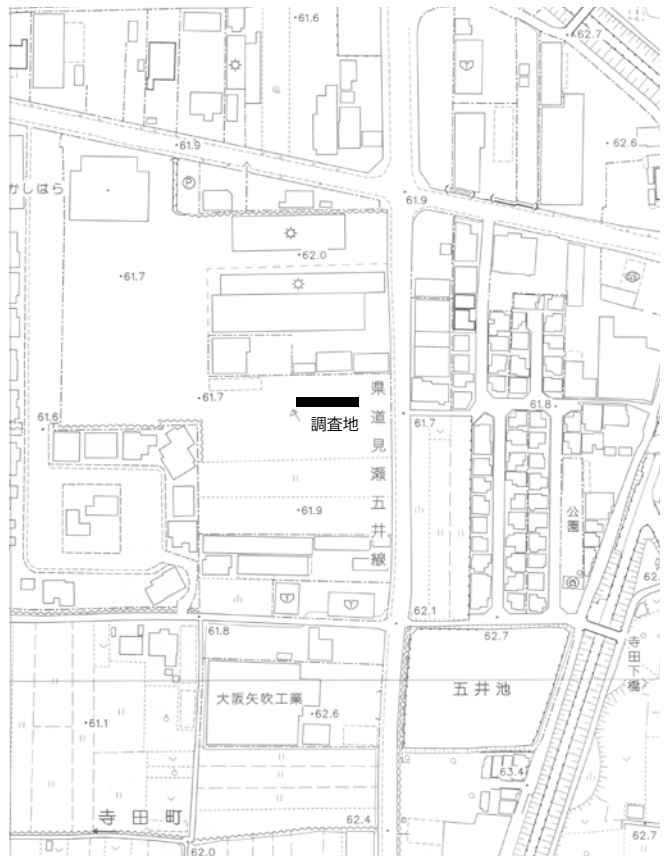


図6 発掘調査地位置図 (S=1/4,000)

遺構検出は主に IV 層上面において実施し、一部 V 層上面でも実施した。

○藤原京期以降の遺構（上層遺構）

耕作に伴うと考える溝（以下、耕作溝）を検出した。耕作溝はいずれも南北方向が主軸となる。耕作溝内からは遺物が出土しなかったが、遺構の重複関係から少なくとも藤原京期より後に掘削された溝であると判断できる。

○藤原京期の遺構（中層遺構）

条坊遺構（06SF）、柵（07SA）、土坑（05SK）を検出した。調査区中央東寄りで検出した 06SF の東側溝 01SD は幅 1.4 m、深さ 0.4 m の溝である。須恵器片が出土した。調査区西端で検出した 06SF の西側溝 02SD は、幅 0.9 m、深さ 0.3 m の溝である。土師器片と須恵器片が出土した。06SF の両側溝溝芯々間距離は約 17 m、路面幅約 15.5 m である。

06SF の東に位置する 07SA として、2 基の柱穴（03・04SP）を確認した。03SP は幅 0.9 m、深さ 0.4 m である。排水溝の断面で確認した為、平面形状は不明である。埋土から土師器・須恵器片が出土した。03SP の北で検出した 04SP は一辺 0.6 m の隅丸方形の柱穴である。いずれの柱穴にも中央に柱痕が残存する。柱間寸法は約 1.8 m（5 尺）と復原できる。

03SP の東で確認した 05SK は幅 1.5 m、深さ 0.2 m である。調査区の南側排水溝断面で存在を確認した為、平面形状は不明である。埋土から土師器片 B、須恵器片、炭化物の塊、木片等

が出土した。

○藤原京期より古い遺構（下層遺構）

V層上面で確認した遺構は溝1条（08SD）である。溝は南東—北西方向が主軸であり、幅0.6m、深さ0.1mである。遺物は出土せず、詳細な時期は不明である。

3. まとめ

検出した条坊遺構06SFの両側溝の芯々間距離約17m（48尺）は過去に確認した西十坊大路（榎教委1996-1次調査）と同程度の規模となる。

西十坊大路東側溝の座標の振れについては、①1996-1次調査の成果（ $X = -164,117.78\text{ m}$ 、 $Y = -20,336.29\text{ m}$ ）と、1996-1次調査の南側で実施した②2008-1次調査の成果（ $X = -164,223.00\text{ m}$ 、 $Y = -20,336.02\text{ m}$ ）から、東側溝の振れが $N-0^{\circ} 8' 49'' -W$ となっている。①・②東側溝と06SF東側溝（ $X = -165,859\text{ m}$ 、 $Y = -20,334.10\text{ m}$ ）の振れは、①—06SF間で $N-0^{\circ} 4' 19'' -W$ 、②—06SF間で $N-0^{\circ} 4' 2'' -W$ となる。

また、①の西十坊大路と06SFが一連の条坊遺構であると仮定した場合の振れは①の西十坊大路条坊芯の座標（ $X = -164,117.78\text{ m}$ 、 $Y = -20,344.79\text{ m}$ ）、06SF条坊芯の座標（ $X = -165,859.00\text{ m}$ 、 $Y = -20,342.55\text{ m}$ ）より、 $N-0^{\circ} 4' 25'' -W$ となる。

以上の通り、①東側溝—②東側溝間、①・②東側溝—06SF東側溝間の振れと、①と06SFの道路芯の振れは近い数値を示している。よって、06SFは①・②の西十坊大路と一連の条坊遺構であると想定できる。

06SF東に存在する柵07SAについては、西十坊大路沿いの柵であったことが想定できる。07SAより東に05SKといった廃棄土坑と想定できる遺構が存在することから、07SAは条坊と宅地を隔てる機能があったと考える。06SF以西の様相は今回の調査では明らかにできなかった。

藤原京期以前の遺構08SDについては、榎教委2010-1次調査で確認した畠遺構の耕作溝と直行する方向に掘削されており、古墳時代の畠遺構との関連が想定できる。

（杉山真由美）

【参考文献】

榎原市千塚資料館1997「土橋遺跡」『かしの歴史をさぐる5』

榎原市教育委員会2010「大藤原京右京北四条十坊、土橋遺跡」『平成20年度榎原市文化財調査年報』

榎原市教育委員会2012『五井遺跡』

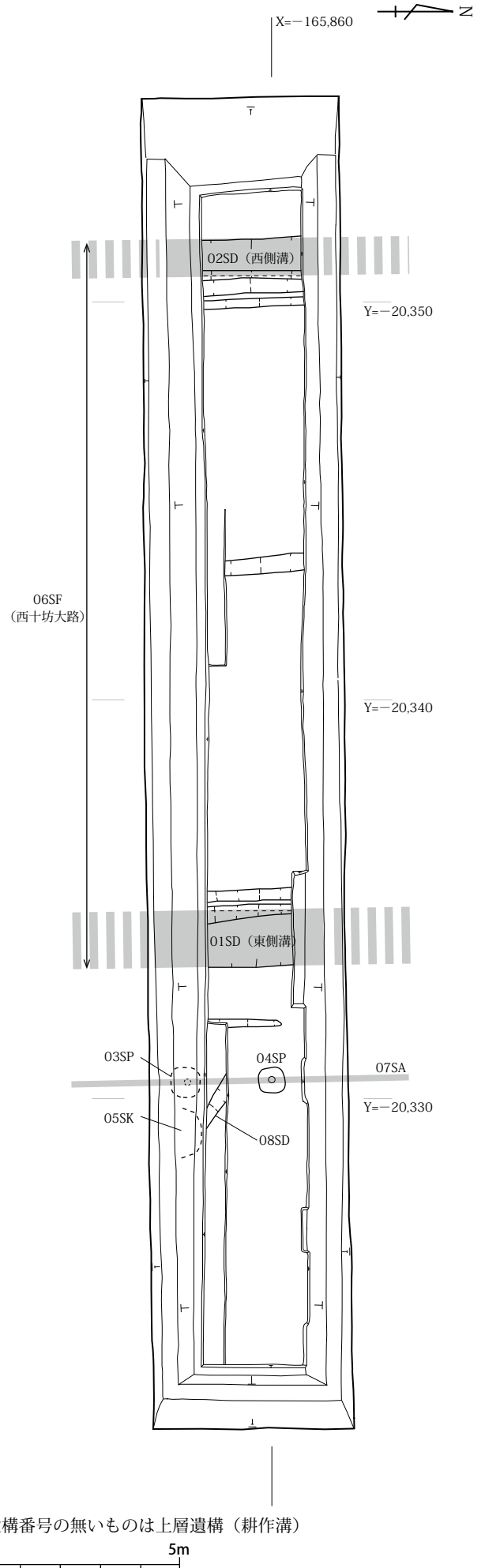


図7 上・中・下層遺構平面図 (S=1/150)



写真21 調査区全景 遺構検出状況 -西から-



写真22 01SD (06SF 東側溝) 検出状況 - 北から -



写真23 02SD (06SF 西側溝) 検出状況 - 北から -



写真24 01SD (06SF 東側溝) と 07SA - 北東から -

藤原京右京五条八・九坊、慈明寺遺跡

調査地 四条町 106

調査期間 平成 28 年 6 月 27 日～平成 28 年 10 月 21 日

調査面積 935.0 m²

調査原因 道路築造

1. はじめに

調査地は高取川右岸に立地し、神武天皇陵の北西約 300 m、奈良県農業研究開発センターの西隣に位置する。調査地は畝傍山北麓にあたり、東側約 150 mには桜川が北西流する。

調査地は藤原京の範囲に含まれる。藤原京復原条坊の呼称では右京五条八・九坊に該当する。調査地の中央付近に西八坊大路と五条大路の交差点が存在する。また、縄文～弥生時代及び奈良時代の遺物散布地である慈明寺遺跡に該当する。

調査地近隣では、調査地の北東約 200 mの地点で実施した発掘調査で西七坊大路を確認している（橿教委 2015 - 2 次）。調査地の西隣で奈良県によって実施された試掘調査（奈良県 2015 年度）で西九坊坊間路が確認されている。藤原京期以外の遺構は調査地の東約 50 mの地点で、弥生時代前期の河道が確認されている（奈良県 2006 年度）。

2. 調査の概要

調査地に 935.0 m²（東西 102.4 m×南北最大 10.0 m）の調査区を設定した。下記Ⅲ・Ⅳ層上面までを重機で掘削、除去し、遺構の検出等の作業は人力で実施した。

調査区の基本層序は以下の通りである。

I 層：灰色細砂質シルト（現代耕作土。上面の標高 64.7 ～ 65.1 m）

II 層：黄灰色粘質シルト、にぶい黄色細砂（中世以降の旧耕作土。上面の標高 64.4 m）

III 層：黒褐色粗砂質シルト（藤原京期頃の整地層。上面の標高 64.2 m。上面が藤原京期遺構検出面）

IV 層：灰黄色極細砂～中砂、にぶい黄橙色粘質シルト、褐灰色細砂質シルト（縄文時代晩期頃の自然堆積層。上面の標高 64.2 ～ 64.6 m。上面が縄文時代晩期～弥生時代前期の遺構検出面）

V 層：灰黄褐色極細砂（縄文時代後期以降の自然堆積層。上面の標高 64.1 ～ 64.4 m）

VI 層：褐灰色中砂（縄文時代後期より古い自然堆積層。上面の標高 63.9 m。）

I 層は現代の耕作土である。

II 層は旧耕作土である。瓦器片が出土し、中世以降の土層と



図8 発掘調査地位置図 (S=1/4,000)

判断できる。

III層からは藤原京期頃の土師器・須恵器片が出土したことから、III層上面で藤原京期の遺構を検出したことから、藤原京期頃の整地層と判断した。III層は調査区西端付近にのみ部分的に堆積する。

IV層以下は自然堆積層である。IV層からは縄文時代晩期の土器が出土したことから、縄文時代晩期頃の土層と判断した。IV層は調査区の位置によって土質が異なり、調査区西端では褐灰色細砂質シルト、調査区中央から西寄りではにぶい黄橙色粘質シルト、調査区東寄りから東端では灰黄色極細砂～中砂となる。

V・VI層の層理面からは縄文時代後期の遺物が出土し、V層は少なくとも縄文時代後期以降の土層であると想定できる。

VI層内からは遺物が出土しなかったが、上面が縄文時代後期の遺構面であった可能性がある。なお、VI層より下は遺物を含まない自然堆積層が 1 m以上の厚さで続いている。

調査地近辺での各土層形成の経緯は以下の通りである。近隣を流れていた河川の作用でVI層の土層が形成され、VI層上面は縄文時代後期頃の一定期間、地表面となっていた。IV・V層が形成されたのは縄文時代後期～晩期にかけてで、最大で 0.7 m 分におよぶ土層が堆積した。V層は河川の緩やかな氾濫に起因すると想定できる。

縄文時代晩期から藤原京期前の間の土層の形成については、後述の通り調査区内の大部分で後世の削平に遭っていると考えられ、どのような経緯であったかは定かでない。藤原京期頃になるとIII層整地層が形成された。藤原京廃絶後は耕地化し、近

世にかけてⅡ層が形成され現在に至ると想定する。

遺構検出はⅢ層およびⅣ層上面において実施した。前述の通り、Ⅲ層は部分的であるため、遺構の大半はⅣ層上面で検出した。特に調査区の中央から東南にかけて遺構検出面の深度は浅く、縄文時代晩期～中近世の遺構を同一面で検出したこと、遺構の深度が浅い箇所があることから、元々の地形は現在より高かったと想定する。

○上層遺構（中世・近世の遺構）

耕作に伴うと考える溝（以下、耕作溝）、井戸3基、溝2条、土坑1基を検出した。耕作溝は調査区全域に存在し、南北方向が主軸となるものが主体である。耕作溝からは藤原京期の土器の他、瓦器・陶磁器片が出土し、中～近世の遺構と判断できる。

井戸は3基とも調査区西端付近で検出した。井戸1・2には井戸枠は存在せず、井戸枠抜き取りの痕跡も無かった。井戸3は長径5m、短径4mの平面形状楕円形の掘方に、板と竹で組まれた井戸枠が設置されている。井戸3の掘方からは陶磁器片が出土しており、近世以降に掘削されたと判断できる。

溝は調査区南壁沿いで東西方向のもの（溝1）と、その東で南北方向のもの（溝2）を検出した。溝1は幅1.5m、溝2は幅1.0mである。いずれの溝も埋土は砂礫が主体で、土層断面ではラミナが見られることから流水があった溝と判断した。両溝からは多量の陶磁器・瓦片と寛永通宝が出土し、近世に埋没したことが明らかである。

土坑は溝1の南側で検出した。南半分は調査区外に続く。土坑からは遺物が出土せず、詳細な時期は不明である。

○下層遺構

①藤原京期

道路遺構（203SF）、柵（204・208SA）、掘立柱建物（216・217・219SB）、溝（215SD）を確認した。

203SFは調査区中央東寄りで見出し、201SDと202SDから成る南北方向の道路遺構である。両側溝の芯々間距離は約17mである。201SDは幅約1.5mで深さ0.1m、203SFの東側溝に該当する。202SDは幅約1.4mで深さ0.1m、203SFの西側溝に該当する。

208SAは202SDの西約1mで見出し、ピット3基から成る。各ピットは平面形状隅丸方形を呈す。204SAは調査区中央西寄りで見出し、ピット3基から成る。各ピットは平面形状隅丸方形か不整形円形を呈す。

調査区西端では216・217SBを確認した。216SBは南北・東西共に1間分、ピット3基を確認した。各ピットは平面形状隅丸方形を呈す。216SBの北西側のピットは井戸3掘削の際に破壊されている。217SBは216SBの西側に位置し、ピット7基を確認した。各ピットは平面形状隅丸方形か隅丸長方

形を呈す。南北2間以上・東西2間の建物に復元できる。南北方向の柱間間隔は約1.9mで、北側の調査区外に延びる可能性がある。219SBは216SBの東側に位置し、ピット4基を確認した。各ピットは隅丸方形か方形を呈す。南北1間以上・東西2間の建物に復元できる。南北方向の柱間間隔は約1.9mで、南側の調査区外に延びる可能性がある。南東側のピットは排水溝部分か調査区南壁周辺に位置していたと考えるが、排水溝掘削時に破壊した可能性がある。

215SDは217SBの西で確認した幅0.8m、深さ0.5mの南北溝である。遺構内から、須恵器環と平瓶が出土した。

②弥生時代中期の遺構

溝3条（212・213・218SD）と不明遺構（214SX）を確認した。

212SDは調査区中央で見出した幅0.5m、深さ0.1mの南北方向溝である。埋土から弥生時代中期前葉の土器が出土した。212SDは北壁から南におよそ2.5mで途切れている。

212SDの先端すぐ西では214SXを見出した。212SDの南端と214SXの遺構深度はほぼ共通すること、埋土が類似することから、212SDと214SXはつながっていた可能性がある。

213SDは214SXの西側で、南西—北東方向に掘削された幅0.6m、深さ0.3mの溝である。218SDは213SDの南西に位置する、南西—北東方向に掘削された幅0.7m、深さ0.2mの溝である。213SDと規模および掘削の方向が共通すること、埋土が類似することから、213SDと一連の溝であった可能性がある。218SDと213SDの埋土の状態から、両溝は自然堆積である程度埋まった後、人為的に埋め戻されたと考える。なお、これらの遺構の機能は不明である。

③縄文時代後～晩期

調査区東端で自然河道（301NR）を見出した。

301NRは南東—北西方向に流れていた幅約8.0m、深さ0.9mの自然河道である。埋土内からは、縄文時代晩期の土器が出土した。流木が多数出土したが、柵のような構造物は存在しなかった。

301NRの東側では、301NRの検出面（Ⅳ層）より下層が砂礫層・粘土層であり、301NRより更に古い時代の自然河道とその堆積であると判断した。下層の河道の広がり時期を確認する目的で断ち割り調査を実施した。①301NRの東側は調査区東端まで、301NRより下層の河道が存在していること、②Ⅳ～Ⅵ層は下層の河道による堆積であること、③301NRより東側でもⅥ層に相当する土層が存在し、その上面で縄文時代後期の土器が出土したこと、以上3点の成果があった。なお、これらの河道の埋土には畝傍山に由来する流紋岩片が多量に含まれており、畝傍山東麓を流れる桜川のかつての支流であったことが想定できる。

調査区の西寄りでも、Ⅴ層とⅥ層の間から縄文土器片が出土



图9 上層遺構平面図 (S=1/250)

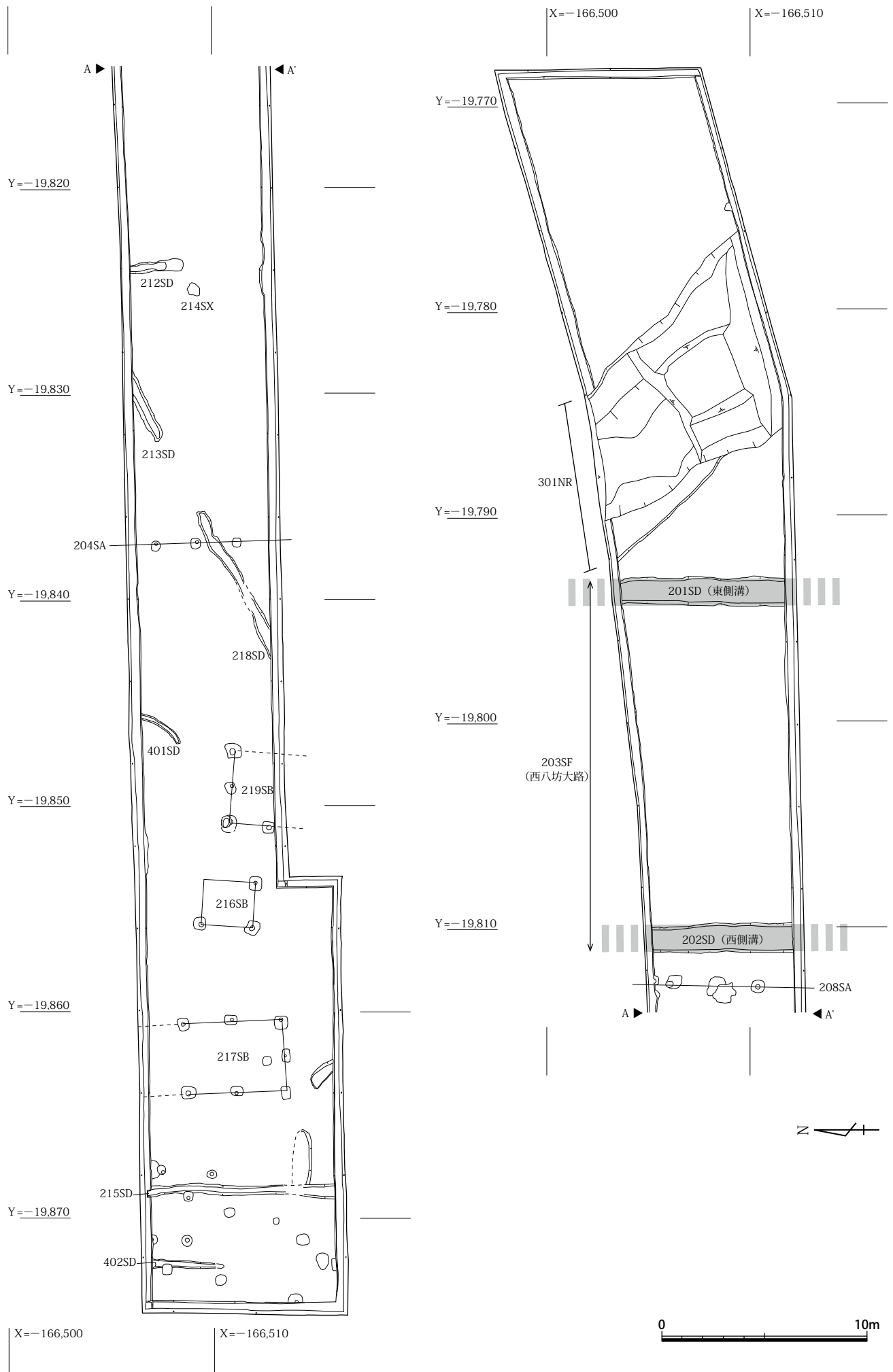


图 10 下層遺構平面図 (S=1/250)

しており、同様に下層確認を目的とした断ち割り調査を実施した。VI層上面からは縄文時代後期の土器、サヌカイト剥片が出土した他、炭の集積、被熱して割れたような石が出土し、縄文時代後期の生活面が存在していたと想定できる。

なお、調査区中央から西は縄文時代後期の生活面が広がるが、遺物が集中するのは調査区西寄りの一角のみである。

○時期不明の遺構

溝2条を検出した。

調査区西端付近、219SBの北側で検出した401SDは北—南西方向に彎曲する溝で、幅0.2m、深さ0.1mである。215SDの西側3mの地点で検出した402SDは南北方向の溝で、幅0.3m、深さ0.2mである。どちらの遺構からも遺物は出土しなかった。遺構の時期と機能は不明である。層序から少なくとも中世より古い遺構と判断できる。

3. まとめ

道路遺構203SFはその検出位置から西八坊大路である可能性がある。以下、規模と近隣の条坊遺構検出例との位置関係から、203SFが西八坊大路であった可能性について考察する。

203SFの溝芯々間距離は約17mで、48大尺に復原可能である。藤原京の一般的な大路(16m、45大尺)より広いが、溝芯々間距離17m以上の大路の例は存在するため、203SFの規模は大路として異質なものではないと考える。

続いて203SFと、西七坊大路検出例(榎教委2015-2次)、西九坊坊間路検出例(榎原考古学研究所2015年)との位置関係を確認する。各条坊遺構の道路芯の座標は以下の通りである。

①西七坊大路 $X = -166,450.00$ m、 $Y = -19,536.70$ m

②西九坊坊間路 $X = -166,495.00$ m、 $Y = -19,936.20$ m

③203SF $X = -166,505.00$ m、 $Y = -19,802.00$ m

調査地周辺での西八坊大路道路芯は大路間の距離を750大尺(265.5m)とすると、①・②から $Y = -19,802.20 \sim -19,803.40$ m付近であると想定できる。③Y座標は-19,802.00mであり、復原した西八坊大路道路芯のY座標の数値に近い数値となる。以上、遺構の規模と位置関係から、現状では203SFが西八坊大路であった可能性の高い遺構であると判断する。

宅地内の区画が目的であった可能性のある遺構も存在する。調査区西端に位置する215SDは $Y = -19,868.70$ mに位置し、203SF道路芯から66.7mの地点に位置しており、402SDとともに宅地内区画道路の側溝として掘削された可能性がある。また、203SFと215SDのちょうど中間には204SA($Y = -19,837.50$ m)が存在しており、坪内を区画する柵であった可能性がある。

藤原京期の建物跡等の遺構(216・217SB他)は204SAの

西側に集中する。建物を構成すると判断できたピット以外にも、多くのピットが存在する。203SFが西八坊大路であったことを前提とすると、その西側に約30mの空閑地が存在することとなる。また、203SFの東側にも当該期の遺構は存在しなかった。後世の削平に遭い遺構が失われたことが考えられるが、203SFや208SAが残っていることから、元々宅地としての利用が希薄な部分であったと想定できる。

(杉山真由美)



写真 25 調査区全景 上層遺構検出状況 - 西から -



写真 26 調査区西部 下層遺構完掘状況 - 東から -



写真27 203SF (西八坊大路) 完掘状況 - 北から -



写真28 217SB 検出状況 - 北から -



写真29 215SD 完掘状況 -北から-



写真30 204SA 検出状況 -北から-



写真31 212・213・218SD 完掘状況 -東から-



写真32 301NR 完掘状況 - 北西から -



写真33 調査区西寄り VI層上面 縄文時代後期遺物出土状況 - 北西から -

藤原京右京九条十坊

調査地 大谷町 92 - 2

調査期間 平成 28 年 11 月 15 日～平成 28 年 11 月 24 日

調査面積 66.0 m²

調査原因 個人住宅建築

1. はじめに

調査地は畝傍山西麓に立地し、安寧天皇陵の北東約 50 m に位置する。

調査地は日本で最初の本格的な都城である藤原京の範囲に入る。藤原京復原条坊の呼称では藤原京右京九条十坊西北坪となり、西京極に東接する。

2. 調査の概要

調査地の南側、建物建設箇所を避けて 64.0 m² (南北 4.0 m × 東西 16.0 m) の調査区を設定した。調査の途中で、調査区西端で遺構 (後述の 201SD) を部分的に検出したため、遺構の規模を確認する目的で調査区西端の南隅と北隅をそれぞれ 1.0 m² ずつ西に拡張した。よって、最終的な調査面積は 66.0 m² となった。下記Ⅲ層上面までを重機で掘削、除去し、その他の遺構の検出、掘り下げ等の作業は人力で実施した。

調査区の基本層序は以下の通りである。

I 層：灰色シルト (現代耕作土と床土。上面の標高 69.8 m)

II 層：灰色細礫混じりシルト、褐灰色粗砂質シルト (旧耕作土。上面の標高 69.5 ～ 69.6 m)

Ⅲ層：暗褐色シルト、明黄褐色粘土 (弥生時代後期以降の自然堆積層。上面の標高 69.2 ～ 69.3 m。調査区西端で確認)

IV 層：灰白色極粗砂、灰色粗砂、黄灰色中砂～礫、緑灰色粘土 (弥生中期以前の自然堆積層。上面の標高 69.4 ～ 69.0 m。東から西に向かって傾斜)

II 層からは陶磁器片が出土し、近世以降の形成と判断できる。

Ⅲ層からは弥生時代後期の土器が出土し、弥生時代後期以降の形成と判断できる。

IV 層は遺物を含まず、詳細な土層の形成時期は不明であるが、少なくとも弥生時代中期以前の形成と判断する。

遺構検出はⅢ層上面において実施した。遺構の重複関係から上層遺構と下層遺構に分かれる。

上層遺構は耕作に伴うと考える溝 (以下、耕作溝) である。南北方向に主軸を持つ耕作溝 14 条を検出した。耕作溝内からは僅かながら瓦器片が出土し、中世以降に掘削されたと判断できる。また、弥生土器が多量に出土している。この弥生土器は溝埋没時に遺構の肩が崩れる等してⅢ層内から混入したものと

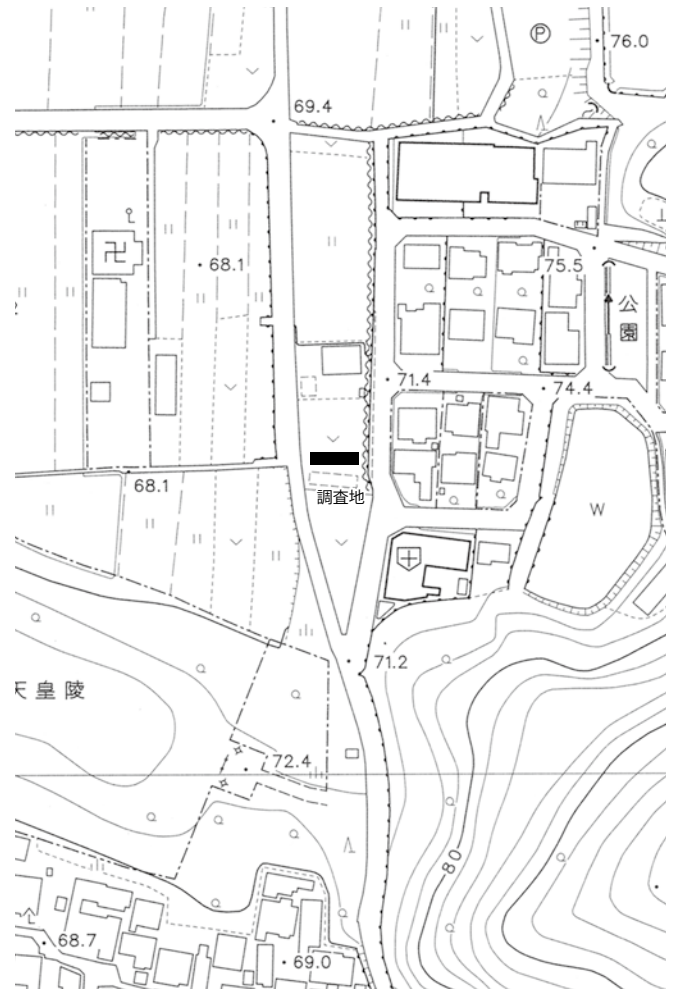


図11 発掘調査地位置図 (S=1/2,500)

想定する。

下層遺構は南北方向の溝 1 条 (201SD) で、調査区西端で検出した。201SD は最大幅 1.3 m、最大深度 0.4 m の断面形状半楕円形を呈す。201SD の出土遺物は大半がⅢ層から混入した弥生土器であるが、僅かながら須恵器片が含まれており、少なくとも古墳時代中期以降の埋没であることが想定できる。

3. まとめ

今回の調査では中世以降の耕作溝、古墳時代中期～中世の間に掘削された溝を検出した。明らかに藤原京期と判明した遺構は存在しなかったが、201SD は藤原京西京極に近い位置で検出した南北溝であるため、西十坊大路の道路側溝である可能性がある。以下、201SD について検討する。

最も近隣で西十坊大路と想定できる遺構を確認しているのが、五井町での橿教委 2016 - 3 次調査である。2016 - 3 次調査で確認した 06SF は溝芯々間距離が約 17 m、路面幅約 15.8 m、東側溝の幅 1.4 m、西側溝の幅 0.9 m となる。今回確認した 201SD の規模は 2016 - 3 次 06SF の東側溝に近い。

続いて① 201SD と② 06SF 東側溝、③ 06SF 西側溝の位置関係について検討する。①、②の位置関係は以下の通りである。

① 201SD X= - 167,389.40 m Y= - 20,328.60 m

② 06SF 東側溝 X= - 165,859.00 m Y= - 20,334.10 m



写真34 調査区全景 遺構完掘状況 -西から-



写真35 201SD 完掘状況 -北から-

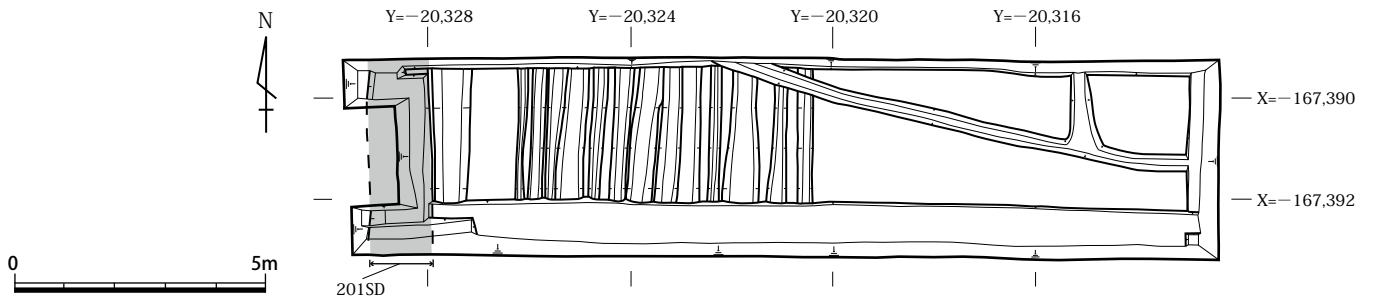


図12 上・下層遺構平面図 (S=1/150)

③06SF西側溝 X= - 165,859.00 m Y= - 20,351.10 m

①—②間の振れはN—0° 12′ 21″ —Wとなる。また、①—③間の振れはN—0° 50′ 32″ —Wとなる。現時点においては、201SDは2016 - 3次06SFのいずれかの側溝と一連の溝であった可能性のある遺構と言える。

(杉山真由美)

一町遺跡

調査地 一町 697 他 10 筆

調査期間 平成 28 年 12 月 8 日～平成 29 年 3 月 10 日

調査面積 180.8 m²

調査原因 一町市道拡幅事業

1. はじめに

調査地は曾我川右岸に立地し、貝吹山の西麓部分の丘陵と扇状地性低地の境目に位置する。調査地から北東約 400 m の地点には橿原市一町配水場が立地している。

調査地は弥生時代全時期を通して営まれた集落跡である一町遺跡の範囲の中心に位置する。

今回の調査地より北側では橿原市教育委員会が調査を実施した結果、弥生時代中期後半～後期の溝やピットを検出し、遺跡の北半においても集落域が広がっていることを認識した（橿教委 2009 - 1・11 次調査）。また、橿原考古学研究所によって、今回の調査区（下記 4～6 区）に接した箇所では発掘調査が実施された（奈良県 2006 年）。この調査では、弥生時代中期と弥生時代後期の遺構面が各 1 面確認され、溝やピット、土坑の他、土器棺が検出された。弥生時代中期までは微高地上に集落を形成し、弥生時代後期には微高地間の凹地が埋め立てられて集落域が拡大したと考察されている。

2. 調査の概要

調査区は道路拡幅箇所にて 9 箇所を設定した。調査区は北から順に 1～6 区、南の 3 調査区は東から順に 7～9 区と呼称した。調査区の面積は 1 区が 8.2 m²、2 区が 25.0 m²、3 区が 17.9 m²、4 区が 17.8 m²、5 区が 10.4 m²、6 区が 9.8 m²、7 区が 27.7 m²、8 区が 38.8 m²、9 区が 25.2 m² で、合計 180.8 m² である。調査区は現状の道路と拡幅部分の形状に合わせて設定した。遺構面上面（1 区はⅣ層、3 区はⅣ層、9 区はⅥ層、他はⅢ層が遺構面）までを重機で掘削、除去し、遺構の検出等の作業は人力で実施した。

基本層序はそれぞれ以下の通りに堆積する。なお、番号が共通する土層は各調査区を通して概ね対応する土層である。

<1 区>

I 層：灰色細砂質シルト（現代造成土・耕作土。上面の標高 74.5 m）

II 層：灰黄褐色細砂質シルト（旧耕作土。上面の標高 73.7 m）

IV～V 層：灰オリーブ色極細砂質シルト（時期不明の自然堆積層。上面の標高 73.6 m。上面が中世以降の遺構面）

VI 層：灰黄褐色シルト、青灰色粘土（縄文時代以前の自然堆

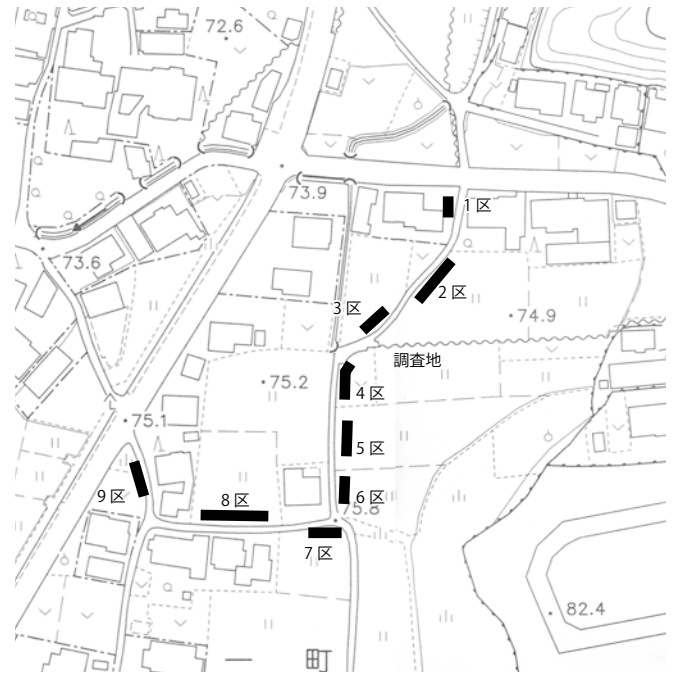


図13 発掘調査地位置図 (S=1/2,500)

積層。上面の標高 73.4 m)

<2・4～6 区>

I 層：黄灰色・褐灰色シルト（現代造成土・耕作土。上面の標高 74.7～75.3 m）

II 層：にぶい黄橙色シルト（上面の標高 74.5～75.0 m）

III 層：にぶい黄褐色シルト、橙色粘質シルト、明黄褐色細砂、礫混じりシルト（弥生中期中葉の自然堆積層。上面の標高 74.2～74.8 m、）

V 層：褐灰色粘質シルト、灰白色細砂～礫（弥生時代前期の自然堆積層。上面の標高 74.2～74.6 m）

<3 区>

I 層：黄灰色細砂質シルト（現代耕作土。上面の標高 74.0 m）

IV～V 層：灰色シルト～褐灰色粗砂（時期不明の自然堆積層。上面の標高 73.7 m）

<7・8 区>

I 層：灰色・黄灰色中砂質シルト（現代耕作土。上面の標高 75.1 m）

II 層：灰黄～灰白色細砂質シルト（上面の標高 74.7～74.8 m）

III 層：褐色～明褐色シルト、黒褐色礫混じりシルト（上面の標高 74.6 m）

IV 層：灰色細砂、暗オリーブ礫混じりシルト（弥生時代中期前葉の自然堆積。上面の標高 74.1～74.2 m）

V 層：灰色極細砂、青灰色粘土～極細砂（弥生時代前期の自然堆積。上面の標高 73.8～74.1 m）

<9 区>

I 層：灰黄褐色シルト、灰色礫混じりシルト（現代造成土・耕作土。上面の標高 74.3～74.8 m。北が高い）

VI 層：明緑灰色極細砂、灰オリーブ色中砂（上面の標高 73.0～73.5 m。南東が高い）

遺構検出は各調査区においてⅢ～Ⅵ層各上面で実施した。なお、1・3区では、遺構のベース層となる土層がⅣ層かⅤ層のいずれかに相当すると判断した。

Ⅱ層は旧耕作土である。瓦器片、磁器片が出土し、中～近世の土層と判断できる。

Ⅲ層からは2・7・8区で弥生時代中期中葉の土器が出土しており、弥生時代中期中葉以降の土層と判断できる。Ⅲ層は基本的には褐色系の細砂・シルト質で概ね共通するが、8区のみ灰黄褐色・黒褐色の礫や粗砂から成り、土層の厚さが最大0.5 mと他調査区よりやや厚い。また、1・3・9区にはⅢ層が存在せず、弥生時代より後にⅢ層が破壊を受けたか、元々Ⅲ層が形成されていなかったことが想定できる。

Ⅳ層からは7・8区で弥生時代中期前葉の土器が出土しており、弥生時代中期前葉以降の土層と判断できる。

Ⅴ層からは遺物が出土しなかったが、層序から弥生時代前期の土層と想定する。

Ⅵ層からは1区で縄文土器が出土しており、縄文時代以降の土層と判断できる。

○中世以降の遺構

3・9区を除く全ての調査区で耕作溝を検出した。Ⅱ層直下となるⅢ層上面(2・4～8区)・Ⅳ～Ⅴ層に相当する土層の上面(1区)が当該期の遺構面である。耕作溝は主軸が東西方向のものと南北方向のものがある。

1・2・4～6区では東西方向の溝が南北方向の溝より新しい傾向がある。7区では溝の重複関係から溝の掘削は3時期以上に細分できる。8区では南北方向の溝が東西方向の溝より新しい傾向がある。出土遺物は弥生土器が多いが、僅かに瓦器を含むことから中世の耕作溝と想定できる。

○弥生時代中期中葉～古代の遺構

落ち込み、溝、ピット、土坑を検出した。以下、主な遺構について調査区毎に記述する。Ⅲ層上面(2・4～8区)、Ⅳ層上面(8区)が当該期の遺構検出面である。

〈2区〉溝4条(2122・2125SD他)・ピット14基(2114・2118SP他)を検出した。

遺構の重複関係から、最も新しいと判断できる溝は2122・2125SDである。いずれも、幅約0.2 m、深さ約0.3 m、断面形状台形の溝で、埋土が共通する。2122SDは南北方向、2125SDは西南西―東北東方向が主軸である。2125SDからは弥生時代後期中葉の土器(図15-6)が出土した。他の溝は、幅0.5～0.6 m、深さ約0.1 mである。東西方向が主軸となる溝と、南東から北に向かって折れ曲がる溝がある。

2114・2118SPは直径約0.4～0.5 m、深さ約0.3 m、平面形状円形である。柱痕が残る。他のピットは直径・深さとも

に約0.2 mのものが多い。出土遺物から、これらはいずれも弥生時代後期の遺構と想定できる。

〈4区〉ピット1基を検出した。直径・深さともに約0.2 m、平面形状円形である。

〈5区〉落ち込み1基(5101SX)を検出した。5101SXは調査区北端から南に約3.3 mの全調査区を占め、その南側を部分的に検出した。深さは0.7 mである。4区の南端に同様の遺構は存在しなかったため、5101SXの北端は4区と5区の間には存在すると判断する。下層からは弥生時代中期、上層からは弥生時代後期の土器が出土した。

他にピットを検出した。直径・深さ共に約0.2 m、平面形状円形である。

〈6区〉落ち込み1基(6101SX)、土坑1基(6102SK)を検出した。

6101SXは調査区北端から南に約2.3 mの全調査区を占め、その南東側を部分的に検出した。深さは0.3 mである。5区の南端に同様の遺構は存在しなかったため、6101SXの北端は5区と6区の間には存在すると判断する。6101SXからは、弥生時代後期中葉の土器がまとまって出土した(図15-1～5・8・9・12～15)。出土した土器の残存状態は良好である。

6102SKは直径1 m以上、深さ0.5 mの平面形状不整形の土坑である。北東部のみ検出した。弥生時代後期の土器が出土した。

他に溝・ピットを検出した。

〈7区〉落ち込み1基(7101SX)、土坑3基(7102・7103・7106SK)を検出した。

7101SXは調査区東端から西に約3.5 mの全調査区を占め、その西側を部分的に検出した。深さは0.9 mである。7101SXの検出面等の標高値や埋土の状態、遺構の時期から、東隣で実施された奈良県2007年調査区で確認された谷地形の続きであると想定できる。埋土は粘土質の上層と、炭化物を多く含む腐植土層である下層に分かれる。上層からは弥生時代後期中葉の土器、下層からは中期後葉の土器(図15-26)が出土した。

7101SXの西岸付近には、直径0.1 m程のピットが4基存在し、杭を並べて打ち込んでいたことが想定できる。

土坑3基は、北半分のみ検出した。

7102SKは一辺0.8 m、深さ0.4 m、平面形状隅丸方形と想定する。他のⅢ層上面検出遺構とは埋土の色と質が異なる。遺物は出土せず、詳細な時期は不明であるが、遺構の重複関係から少なくとも弥生時代中期後葉～古代の遺構であると判断できる。

7103SKは直径1.0 m、深さ0.4 m、平面形状円形と想定する。

7106SKは直径1.1 m、深さ0.6 m、平面形状円形と想定する。

出土遺物から、7103SKは弥生時代後期中葉、7106SK(図15-31)は中期後葉の遺構と判断できる。

〈8区〉Ⅲ層上面で、落ち込み1基(8101SX)、土坑2基(8105・8107SK)を検出した。

8101SXは調査区東端から西に約3.2mの全調査区を占め、その西側を部分的に検出した。深さは0.9mである。8101SXの東側を検出する目的で、調査区東端を1.0m程拡張したが、東側の端まで達することができず、正確な規模は不明である。埋土は砂質である上層と、炭化物を含むシルト質である下層に分かれ、上層からは弥生時代後期の土器が出土した。

8105SKは直径0.6m、深さ0.2m程、平面形状円形土坑である。弥生時代中期後葉の土器が多量に出土した。

8107SKは直径2.2m、深さ1.0m、平面形状円形と想定する。弥生時代後期の土器が埋土の上半から多量に出土した(図15-11・16)。

他に溝・ピットを検出した。

Ⅳ層上面で、溝2条(8201・8202SD)を検出した。

8201SDは最大幅2.2m、深さ0.8m程の溝で、南西―北東方向が主軸である。弥生時代中期後葉の土器が出土した。いずれの溝も、上層に粗い砂が堆積し、下層に炭化物を多く含む腐植土層が堆積する。

8202SDは幅1.5m、深さ約0.8m、南北方向の溝である。遺構の重複関係から、8201SDより前に形成されたと判断できる。弥生時代中期中～後葉の土器が出土した。

○弥生時代前期～中期前葉の遺構

溝、ピット、土坑、自然河道を検出した。以下、主な遺構について調査区毎に記述する。2・7・8区ではⅤ層上面、9区ではⅥ層上面に当該期の遺構が存在した。

〈2区〉ピット7基を検出した。いずれも、直径0.2～0.4m、深さ約0.2m、平面形状円形である。ピットからは土器片が出土した。弥生時代中期前葉頃の遺構と想定する。

〈7区〉溝1条、ピット4基、土坑1基、不明遺構1基を検出した。遺構からは弥生土器片が出土した。また、層序から、弥生時代中期前葉の遺構であることが想定できる。

〈8区〉溝2条(8302・8303SD)、自然河道2条(8301・8304NR)を検出した。

8302SDは幅約4.0m、深さ約1.0m、主軸は南北方向である。

8303SDは幅約5.0m、深さ約0.8m、主軸は南北方向である。埋土の状態から、これらの溝には流水があったと想定する。

8301NRは幅5.5m以上、深さ約1.0m、北東岸のみを検出した。弥生時代前期～中期前葉の土器と、鍬先等の木製品が出土した。

8304NRは幅5.5m以上、深さ約0.8m、西岸のみを検出した。

8301NRと8304NRはともに埋土の状態と遺構の規模から自然河道であったと判断した。

8302・8303SD、8304NRからは、弥生時代中期前葉の土器が出土した。

〈9区〉土坑1基(9101SK)、自然河道1条(9102NR)を検出した。

9101SKは直径約1.6m、深さ約0.4m、平面形状円形であると想定する。東半分のみを検出した。弥生時代前期の土器が出土した。

9102NRは幅8m以上、深さ0.6mで、南西岸のみを検出した。北西で一段深くなる。埋土の状態と遺構の規模から自然河道であったと判断した。南側の一段高い部分で、弥生時代前期の土器(図15-17・18・33～35)と木製品が出土した。

いずれも、弥生時代前期頃の遺構と想定する。

○時期不明の遺構

〈1区〉Ⅳ～Ⅴ層に相当する土層上面でピット3基を検出した。ピットは直径0.3～0.4m程、深さ約0.2mである。いずれも遺物が出土せず、詳細な時期は不明である。

〈3区〉Ⅳ～Ⅴ層に相当する土層上面で遺構検出を実施した。調査区東端で自然河道の肩を検出したが、河道内からは遺物が出土しなかった。なお、3区のⅠ層上面の標高値は最も近い2区のⅤ層上面よりさらに0.2m低く、後世の削平等の理由により、既に遺構面が破壊されている可能性がある。

3. まとめ

弥生時代前～中期前葉の遺構は調査地南西部(8・9区)に集中する。自然河道が存在した他、溝(8302・8303SD)、土坑(9101SK)が存在した。8・9区いずれの遺構からも多量の土器と木製品が出土した。木製品には未製品が含まれることから、近隣で木器製作を行っていた可能性がある。

弥生時代中期中・後葉の遺構は、調査地北端(2区)と調査地南端(7・8区)に集中する。流水を伴う溝、ピットや土坑のような遺構の他、自然地形に由来すると考えられる落ち込みが存在した。5区や7区で検出した落ち込みは弥生時代中期から存在し、後期に埋没する傾向がある。溝・自然河道は8区に集中し、弥生時代中期中葉以降の堆積(Ⅲ層)は厚い部分で約0.8mを測る。丘陵からの土砂の運搬作用が最も活発であった時期と想定する。

弥生時代後期の遺構は概ね調査地全域で確認したが、中でも調査地北端(2区)に集中する。落ち込み、溝、ピット、土坑が存在した。2区で確認したピットから建物等の復原は困難であるが、2114・2118SPは同時期の同規模のピットであり、一連の構造物の一部であった可能性がある。2122・2125SDは幅が狭いが整った台形の断面形状を呈し、一連の溝であった可能性がある。なお、同時期の遺構は7・8区においてもまばらに存在(7103SK・8107SK)する。(杉山真由美)

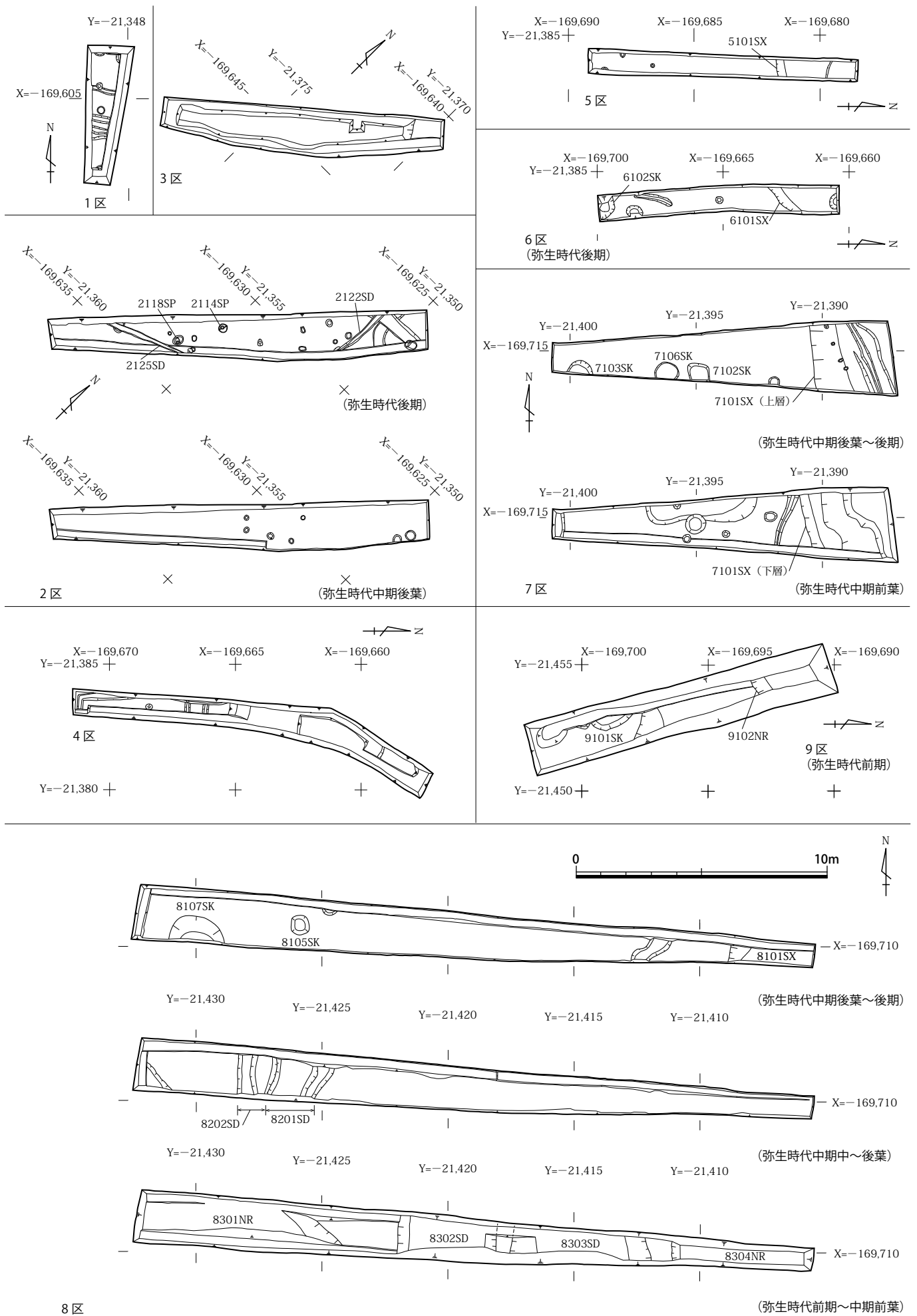
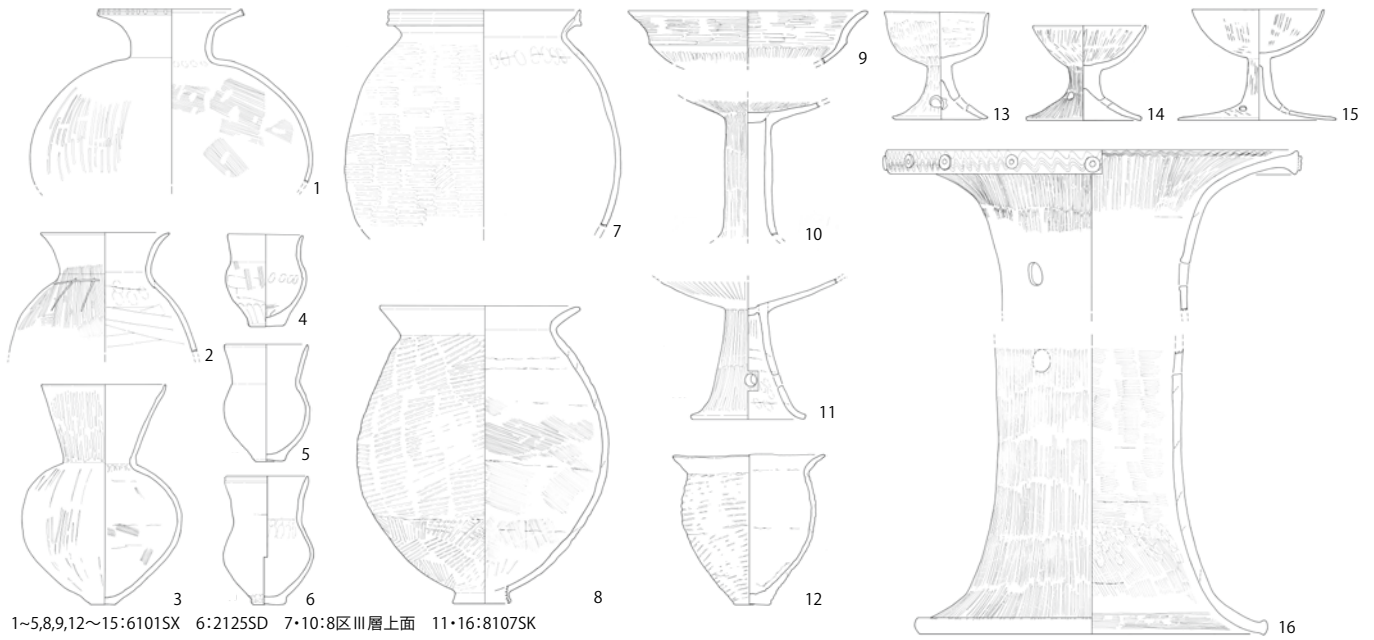
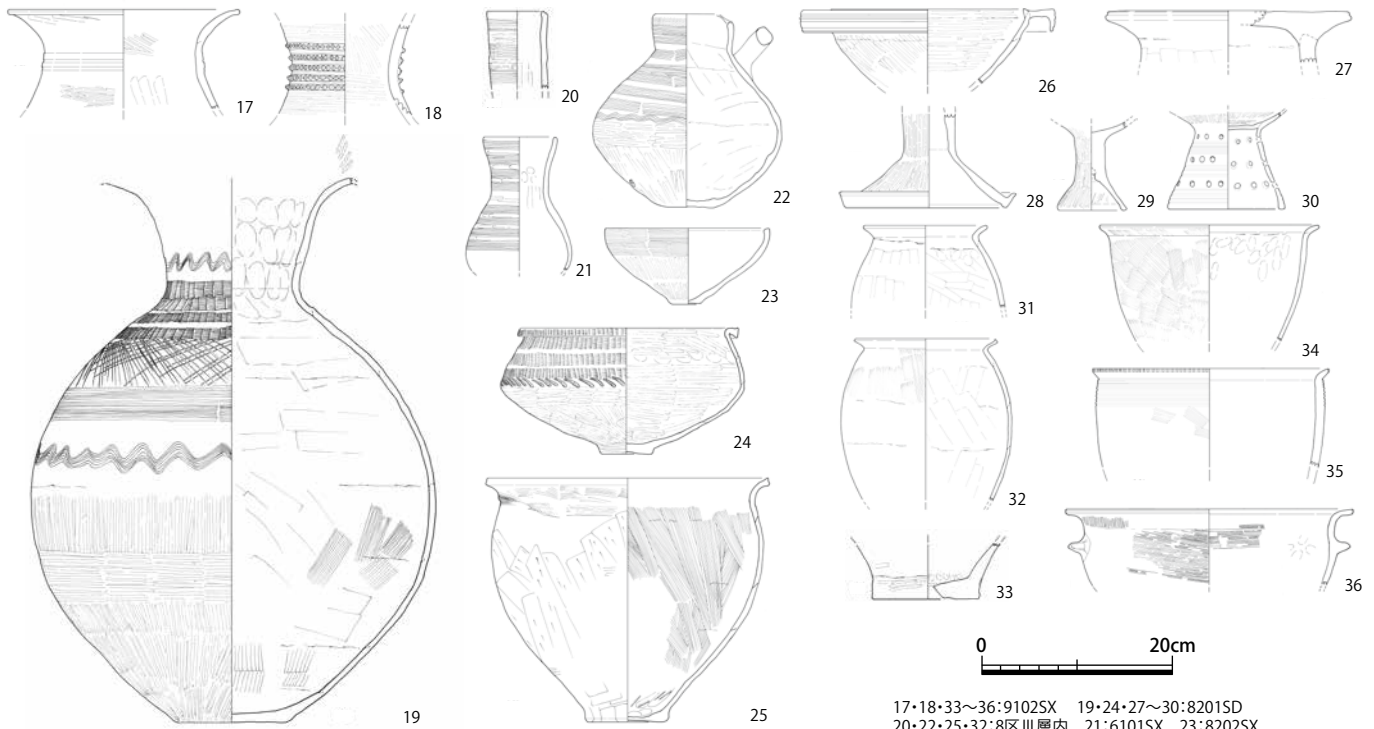


図14 遺構平面図 (S=1/200)



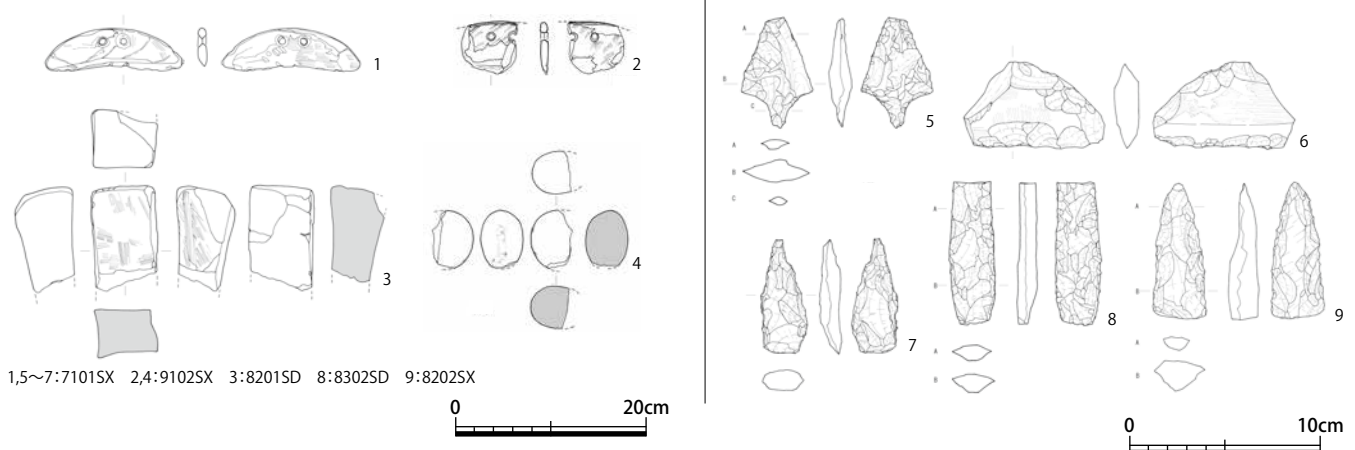
1~5,8,9,12~15:6101SX 6:2125SD 7・10:8区III層上面 11・16:8107SK
 (弥生時代後期の土器)



(弥生時代前・中期の土器)

17・18・33~36:9102SX 19・24・27~30:8201SD
 20・22・25・32:8区III層内 21:6101SX 23:8202SX
 26:7101SX下層 31:7106SK

図15 出土土器実測図 (S=1/8)



1,5~7:7101SX 2,4:9102SX 3:8201SD 8:8302SD 9:8202SX

図16 出土石器実測図 (1~4 : S=1/8、5~9 : S=1/4)



写真 36 1区全景 遺構完掘状況 -北から-



写真 37 3区全景 遺構完掘状況 -北東から-



写真 38 2区全景 弥生時代後期遺構完掘状況 -北東から-



写真 39 2区全景 弥生時代中期遺構完掘状況 -南西から-



写真 40 4区全景 遺構完掘状況 -南から-



写真 41 5区全景 遺構完掘状況 -北から-



写真 42 6区全景 弥生時代後期遺構完掘状況 -北から-



写真 43 9区全景 弥生時代前期遺構完掘状況 -北西から-



写真 44 7区全景 弥生時代中期後葉～後期遺構完掘状況 - 東から -



写真 45 7区全景 弥生時代中期前葉遺構完掘状況 - 東から -



写真 46 8区全景 弥生時代中期後葉～後期遺構完掘状況 - 西から -



写真 47 8区全景 弥生時代中期中～後葉遺構完掘状況 - 西から -



写真 48 8区調査区全景 弥生時代前期～中期前葉遺構検出状況 - 西から -



写真 49 6区 6101SX 遺物出土状況 - 北西から -



写真 50 9区 9102NR 遺物出土状況 - 南西から -

藤原京右京北六条十坊、土橋遺跡

調査地 土橋町 82 番 1 他 4 筆

調査期間 平成 29 年 1 月 11 日～ 29 年 1 月 18 日

調査面積 120.0 m²

調査原因 宅地造成

1. はじめに

調査地は榎原市の北西部、市立真菅北小学校の南方約 300 m の現況水田に位置する。

当該地は藤原京の北西角に隣接する。藤原京復元条坊によると右京北六条十坊の西北坪にあたり、敷地の中央付近に北六条大路推定線が通る。また、弥生～古墳時代の集落跡である土橋遺跡に含まれる。

今回の調査は藤原京の北六条大路の遺構確認および土橋遺跡の様相確認を目的として実施した。

2. 調査概要

調査対象地に、2 箇所の調査区（以下、「北区」、「南区」。）を設定し調査を行った。南区（南北 35 m、東西 3 m）は北六条大路の遺構確認および土橋遺跡の様相確認するため、北区（南北 5 m、東西 3 m）は土橋遺跡の様相確認のため、設定した調査区である。

調査は下記Ⅲ層上面まで重機により掘削を行った。遺構の検出および掘り下げ等の作業は人力で実施した。

調査区の基本層序は以下の通りである。

Ⅰ層：暗緑褐色粘質土（現耕作土。上面の標高 53.3 m。）

Ⅱ層：黄褐色粘質土（床土。上面の標高 53.0～53.1 m。）

Ⅲ層：黒褐色粘質土（古墳時代前期遺物包含層。上面の標高 52.8～52.9 m。ただし、南区南端部より北に 6 m までの区間には、Ⅲ層は存在しない。）

Ⅳ層：黄褐色砂（地山。上面の標高 52.6～52.7 m。）

〈南区〉

遺構は耕作に伴うと考えられる南北方向の溝を 12 条検出した。溝の規模は、幅 0.2～0.35 m、深さ 0.1～0.15 m を測る。

また、査区南端部より北に 3.3 m の地点で、古墳時代前期の土坑を検出した。直径 0.6～0.65 m の不整形を呈し、深さ 0.4 m を測る。

〈北区〉

遺構は耕作に伴うと考えられる南北方向の溝を 5 条検出した。溝の規模は幅 0.15～0.3 m、深さ 0.1～0.15 m を測る。

出土遺物は、土師器、須恵器である。

3. まとめ

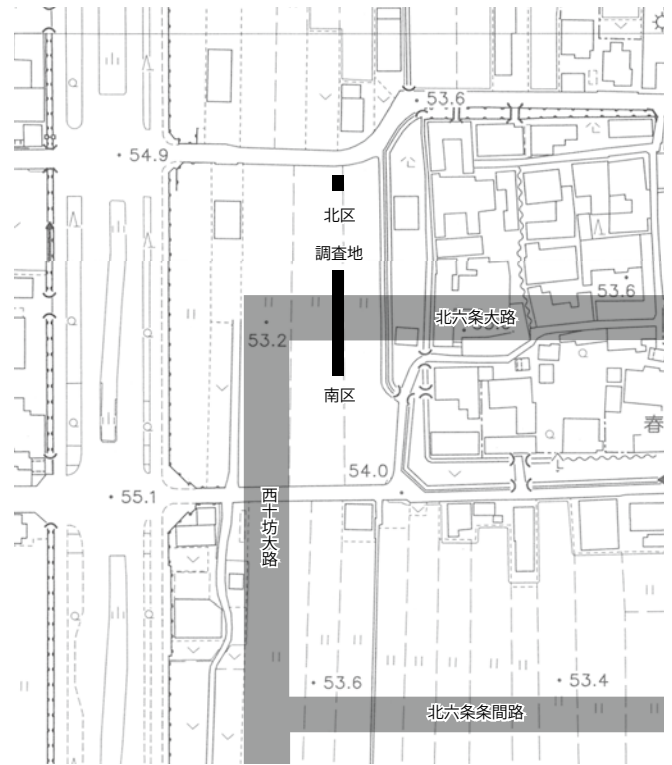


図17 発掘調査地位置図 (S=1/2,500)

藤原京関連では想定された北六条大路は検出されなかった。遺構検出面が現地表面下 0.3～0.4 m と浅いため、後世に削平を受けた可能性が考えられる。

また、古墳時代前期の土坑を検出した。土坑 1 基のみであるが、土橋遺跡北部における当該期の遺構の遺存状況を確認する事ができた。

(平岩欣太)

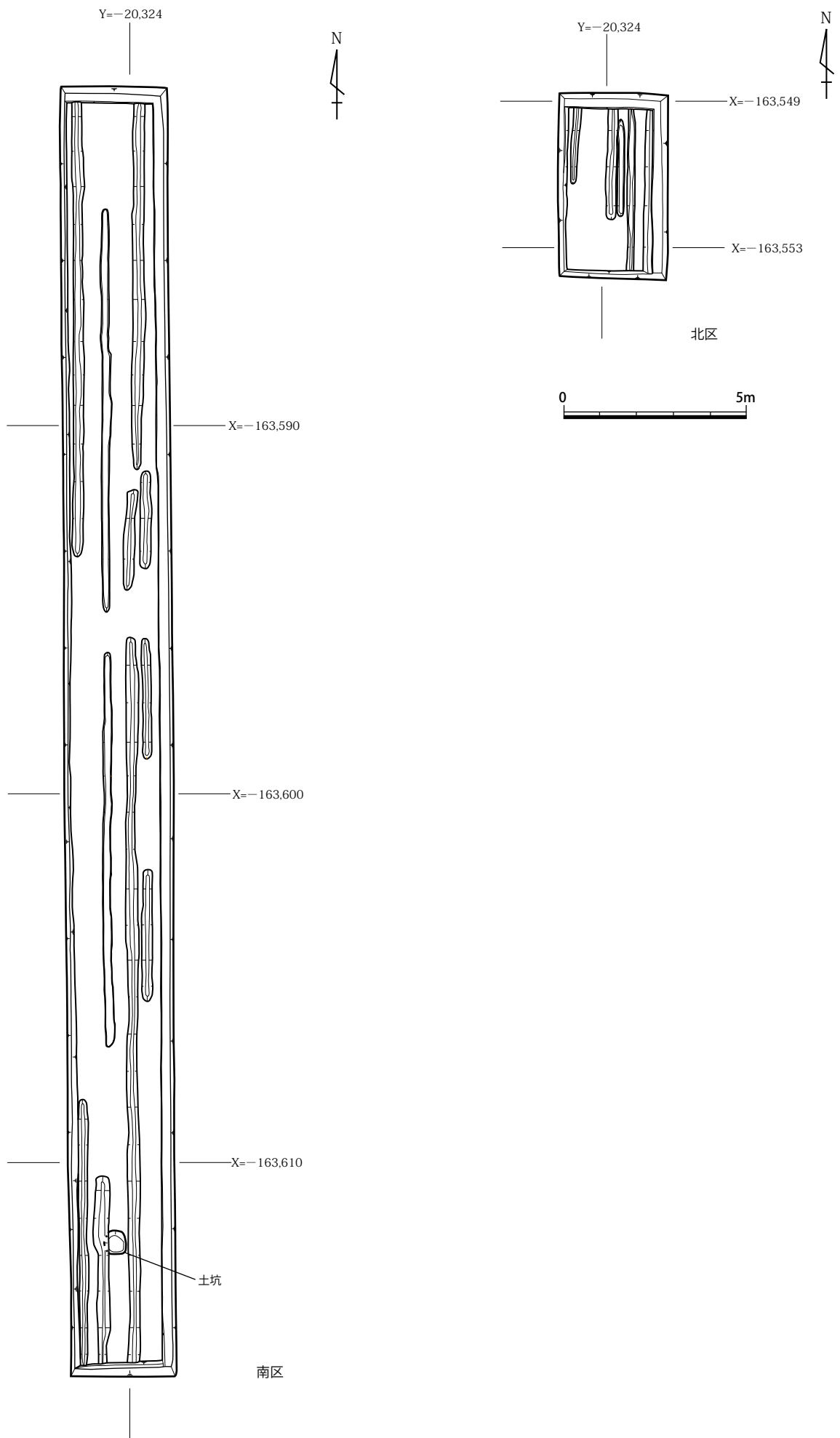


图18 遺構平面図 (S=1/150)



写真 51 南区全景 遺構完掘状況 -南から-



写真 52 南区 土坑内土器出土状況 - 南東から -



写真 53 北区全景 遺構完掘状況 - 北から -

藤原京右京十条五坊、下ツ道

調査地 御坊町 134-1 他 3 筆

調査期間 平成 29 年 3 月 2 日～ 29 年 3 月 9 日

調査面積 54.0 m²

調査原因 店舗建設

1. はじめに

調査地は、近鉄畝傍御陵前駅の南東約 500 m、国道 169 号線に西接する宅地に位置する。

当該地は、藤原京復元条坊によると右京十条五坊の東北坪にあたり、敷地の東側で下ツ道西側溝推定線が通る。

今回の調査は、下ツ道西側溝の確認を目的として実施した。

2. 調査の概要

調査対象地の下ツ道西側溝が想定される範囲に、東西 18 m、南北 3 m の調査区を設定した。

調査は、下記 VI 層上面まで重機による掘削を行った後、遺構の検出および掘り下げ等の作業は人力で実施した。

調査区の基本層序は以下の通りである。

I 層：暗青灰色粘質土（水田耕作土。上面の標高 73.6～73.7 m）

II 層：灰オリブ色粘質土（床土。上面の標高 73.6 m）

III 層：暗褐色砂質土（上面の標高 73.5～73.6 m）

IV 層：灰黄色砂質土、シルト（上面の標高 73.3～73.4 m）

V 層：にぶい黄色微砂（上面の標高 73.1～73.3 m）

VI 層：黄灰色粘土（上面の標高 73.0～73.1 m）

当初、重機掘削を開始した調査区東部で III 層が認められなかったため、VI 層上面を遺構の基盤層と認識し、遺構の検出を行った。最終的に土層確認の結果、溝 1 は III 層を基盤層とする遺構であることが判明した。

検出した遺構は、溝 1・2 である。

溝 1 は調査区東端部に位置する南北溝である。規模は、幅 4.5 m、深さ 1.3 m（調査区南壁での計測）を測る。出土遺物は、須恵器、陶器である。

溝 2 は、溝 1 の西約 2.4 m に位置する、VI 層を基盤層とする南東—北西方向の溝である。規模は、幅 0.7～0.9 m、深さ 0.4 m を測る。出土遺物は無く、時期は不明である。

3. まとめ

調査の結果、溝 1 は下ツ道西側溝推定線上に位置しており、下ツ道西側溝である可能性が考えられる。

既往の調査で下ツ道西側溝の検出例は、①今回の調査地の北約 3.3 km、上品寺池の北約 150 m での発掘調査（榎教委

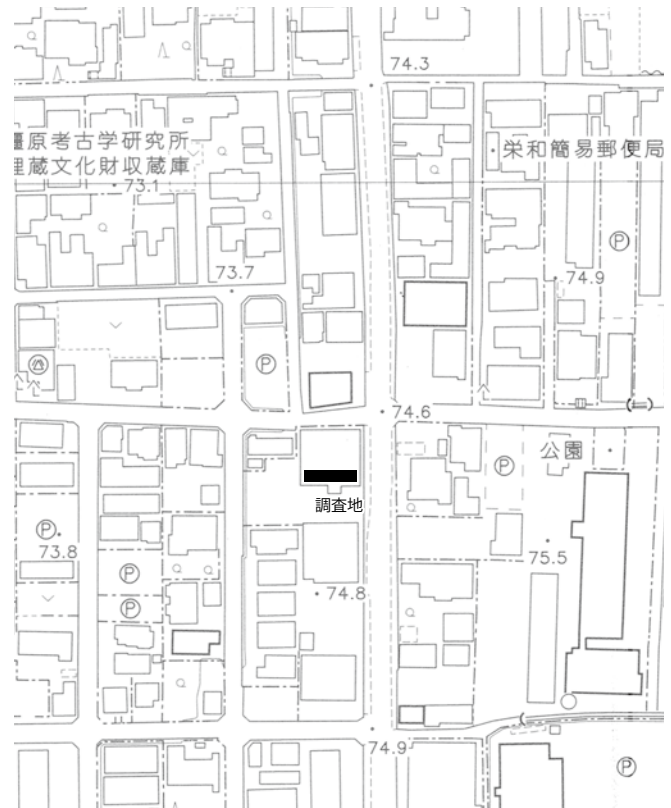


図19 発掘調査地位置図 (S=1/2,500)

1999 - 5 次)、②今回の調査地の北約 460 m、近鉄畝傍御陵前駅の東約 150 m での発掘調査（榎教委 1995-7 次）がある。それぞれの下ツ道西側溝芯の座標値は以下の通りである。

① X= - 164,223.45 m、Y= - 18,775.39 m

② X= - 167,137.37 m、Y= - 18,745.14 m

①—②間の座標の振れは、N—0° 35' 48" —W となる。

一方、今回の調査で検出した溝 1 芯の座標値は X= - 167,599.00 m、Y= - 18,740.10 m である。①—溝 1 間の座標の振れは N—0° 36' 02" —W、②—溝 1 間の座標の振れは N—0° 37' 32" —W となる。

以上のことから、①—②間、①・②—溝 1 の振れは近い数値を示しており、①・②の溝と溝 1 は一連の溝であることが想定できる。

また、①・②・溝 1 間の振れは、岸説藤原京右京域の南北道路の振れ (N—0° 16' 38" —W～N—0° 39' 07" —W) の範囲に収まる。よって、溝 1 は下ツ道西側溝である可能性が高いと言える。今後、周辺の調査成果により更に検討を進めていく必要がある。

(平岩欣太)

【参考文献】

入倉徳裕 2008 「藤原京条坊の精度」『榎原考古学研究所論集』第十五

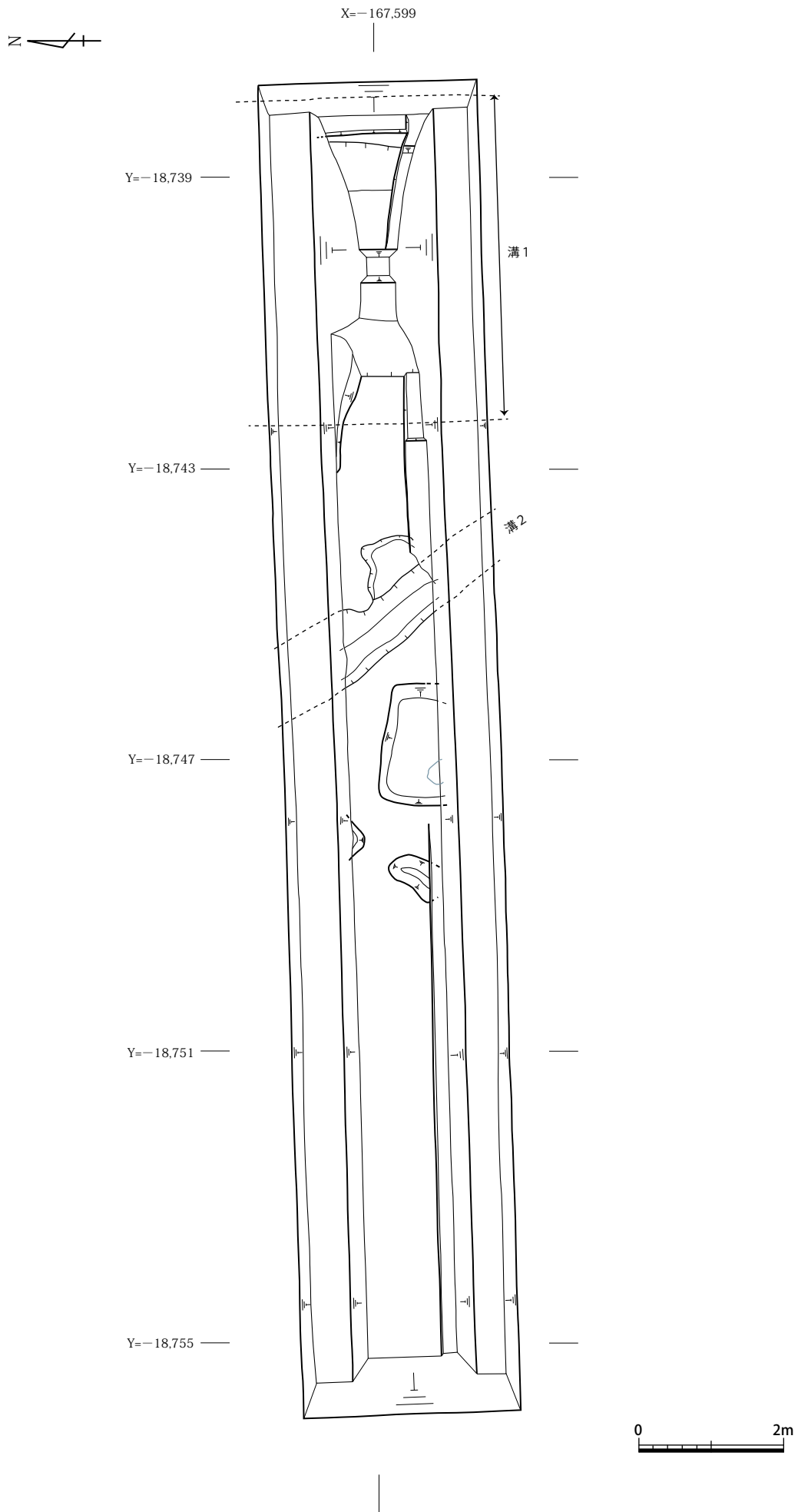


图20 遺構平面図 (S=1/80)



写真 54 調査区全景 遺構完掘状況 - 東から -



写真 55 溝1土層断面 -北から-



写真 56 溝2完掘状況 -南東から-

試掘・確認調査

藤原京右京二条七坊

調査地 今井町一丁目166番3

調査期間 平成28年7月19日

調査面積 10.0㎡

調査原因 個人住宅

1. はじめに

調査地は橿原市の中央部、近鉄橿原線八木西口駅の南西250mの宅地に位置する。この試掘調査は、当該地における遺構面の深さと遺構の有無及び、工事による埋蔵文化財への影響の確認を目的として実施した。

2. 調査の方法と概要

調査は建物の建設予定地の南東部に調査区を設定し実施した。調査区の規模は10.0㎡（東西5m・南北2m）である。

土層は、以下のとおりに堆積している。

I層：現代造成土（厚さ約0.2m）

II層：黄褐色粘質土（微砂混じり。厚さ0.25m）

III層：暗灰黄色粘質土（厚さ0.2m）

IV層：青灰色粘質土（微砂混じり。厚さ0.05m）

V層：青灰色粘土（粘性あり。厚さ0.15m）

VI層：青灰色粘土（微砂混じり。厚さ0.2m）

VII層：暗青灰色粘質土（微砂混じり。厚さ0.45m以上）

VII層上面で遺構検出を実施したが、遺構は確認されなかった。遺物は、VII層から13世紀代の瓦器塚が出土した。

3. まとめ

試掘調査の結果、明確な遺構は存在しなかった。

（平岩欣太）

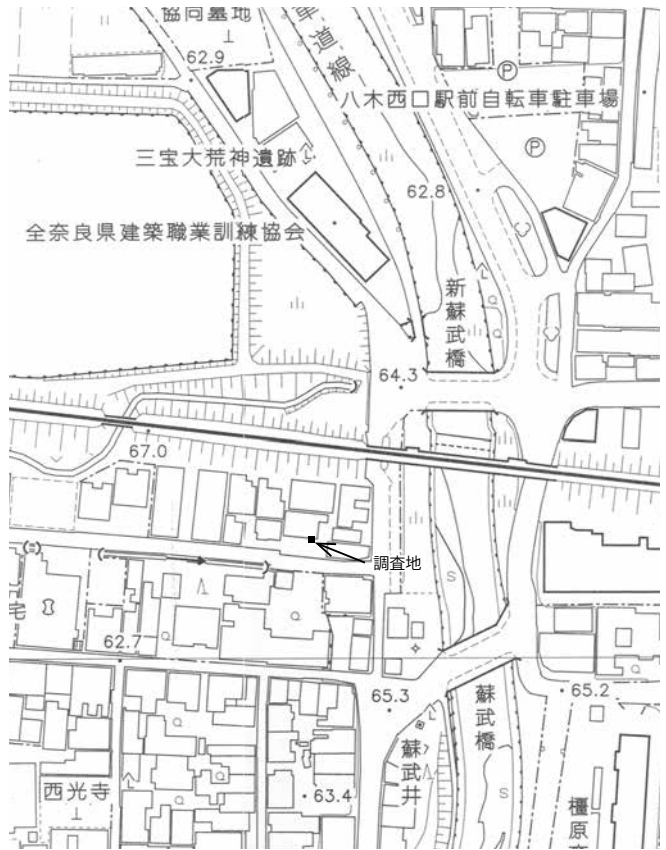


図21 発掘調査地位置図 (S=1/2,500)



写真57 調査区全景 VII層上面検出状況 -北から-

試掘・確認調査

藤原京右京三条三坊

調査地 縄手町 417 番地

調査期間 平成 29 年 3 月 10 日

調査面積 4.0 m²

調査原因 個人住宅

1. はじめに

調査地は国道 165 号線橿原バイパスから西に約 100 m、晩成幼稚園から東に約 200 m の地点に位置する。現況は宅地として利用されている。本調査は、当該地における遺構面の深さと遺構の有無の確認を目的として実施した。

2. 調査の方法と概要

調査区は、申請地南東側に設定した。調査区の規模は 4.0 m² (一辺 2.0 m) である。

土層は、以下の通りに堆積している。

I 層：褐色～黄褐色中砂（現代造成土。上面は西側道路面＋0.3 m）

II 層：青灰色粘土、淡青灰色粘土（耕作土。上面は西側道路面－1.3 m）

III 層：灰色粘質土（旧耕作土。上面は西側道路面－1.7 m）

IV 層：暗褐色砂質シルト（自然堆積層。上面は西側道路面－1.9 m。厚さ 0.2 m 以上。上面が遺構面）

遺構の検出は IV 層上面で実施した。調査の結果、2 条の耕作溝と不明遺構を確認した。不明遺構は、耕作溝掘削の際に一部を破壊されており、耕作溝より古い段階の遺構と判断できる。今回掘削した範囲では、遺構の一部のみの検出に留まり、詳細な規模や形状は不明である。

3. まとめ

調査の結果、西側道路面－1.9 m で遺構面を確認した。不明遺構は、藤原京期まで遡る可能性がある。

(杉山真由美)

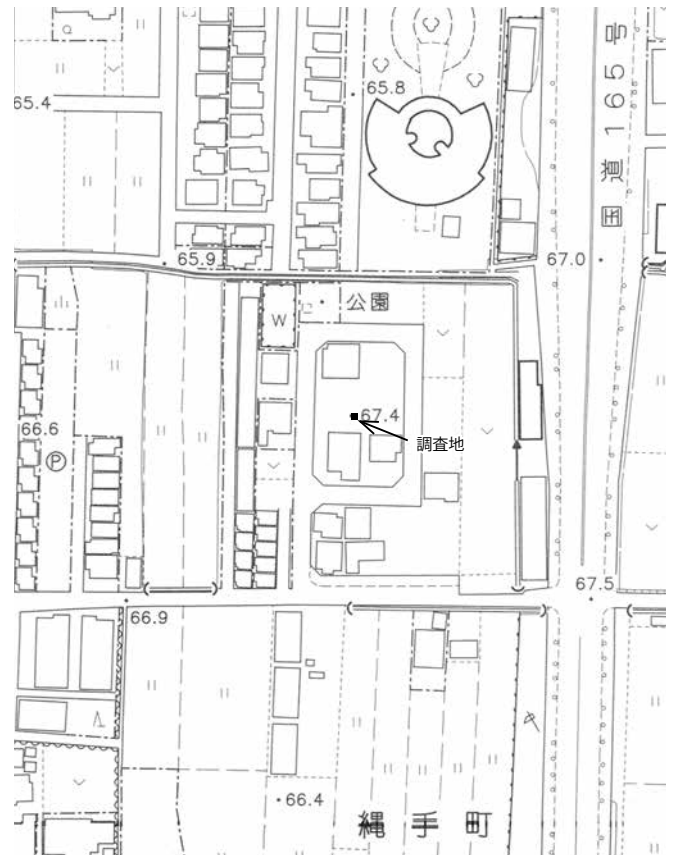


図22 発掘調査地位置図 (S=1/2,500)



写真 58 調査区全景 遺構検出状況 -北から-

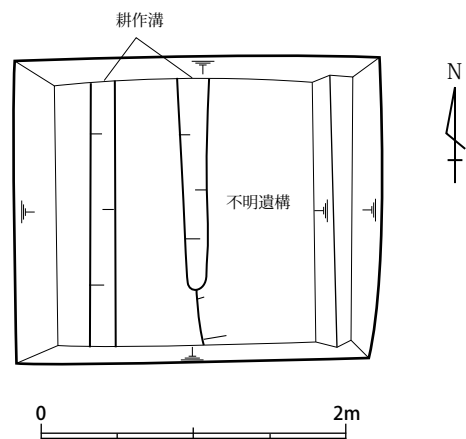


図 23 遺構平面図 (S=1/50)

Ⅱ．出土遺物保存処理事業

発掘調査によって出土した遺物の中には、その材質によって外気に触れることで大きく変形し、劣化・崩壊するものがある。それを防ぎ、出土した状態を保持するため、各材質に応じた化学的処理を行っている。

木を材料として製作された遺物は長時間土の中に埋まっている間に木質内部の組織が水に置き換わってしまい、スポンジのような状態となっている。そのため、出土後乾燥が進むと変色・変形し元の形を保つことが出来なくなることから保存処理を行い、脆弱になった遺物を強化し形状の安定を図った。保存処理に使用する薬剤・溶剤については、将来的な再処理を視野に入れた可逆性のあるものを使用している。

平成 28 年度は国庫補助事業により、市内遺跡発掘調査出土木製遺物保存処理委託業務で、木製遺物（合計 10 点）の保存処理を行った。保存処理した木製遺物は一覧の通りである。

今年度の保存処理委託業務では、トレハロース含浸処理法による保存処理を行った。業務では、保存処理前後の写真撮影により遺物の状態を確認すると共に、遺物の寸法、重量の記録をとった。

保存処理木製遺物一覧

遺 跡 名		遺物名	点数
橿教委2001 - 7次	大藤原京右京北三条五坊	加工木	1
橿教委1989 - 16次	藤原京右京八条二坊	柄	1
橿教委1987 - 1次	坪井・大福遺跡（クレ橋地区）	加工木	1
橿教委1998 - 7次	大藤原京右京北二・三条五・六坊	斎申	2
橿教委2003 - 2次	藤原京左京一・二条四坊	人形	2
橿教委2003 - 2次	藤原京左京一・二条四坊	加工木	3

（平岩欣太）

Ⅲ．文化財諸申請処理業務

平成 28 年度 文化財諸申請事務処理件数一覧表

	踏 査 願	の 発 掘 出 調 査	埋蔵文化財発掘届出					埋蔵文化財発掘通知					現状変更		取 下 書
			通知内容					通知内容					許 可 申 請	完 了 届	
			発掘 調査	工事 立会	慎重 工事	工事 先行	計	発掘 調査	工事 立会	慎重 工事	工事 先行	計			
道路	1			3	6		9	1	3	1	3	8	2		
住宅			5	14	52	1	72								
個人住宅			4	17	110	3	134								1
店舗			4	2	7		13								
住宅兼工場等															
その他建物			4	2	5		11	1		1		2			
宅地造成		2	13	3	3	1	20								
その他開発	1		2	5	21	2	30	2	18	18	4	42	17	6	1
ガス等				1			1		4	2		6			
農業関係									3			3	1		
河川										1		1			
学校									1	2	1	4			
工場						1	1								
公園造成															
観光開発													2	1	
学術													2	2	
遺跡整備													2		
その他															
計	2	2	32	47	204	8	291	4	29	25	8	66	26	9	1
総件数															397

Ⅳ．普及啓発事業

1. 講師派遣

市内外の要請に応じて、講師の派遣を行っている。

○5月15日（日）

大阪府立近つ飛鳥博物館 平成 28 年度春季特別展

「古墳とは何か - 葬送儀礼からみた古墳 - 」に係る古墳見学の案内

沼山古墳および小谷古墳 竹田正則

○7月16日(土)

鈴鹿市考古博物館 企画展

「鈴鹿の古墳I - 小さな古墳たち -」関連講演会講師として

鈴鹿市考古博物館 石坂泰士

○10月14日(金)

公立大学法人奈良県立大学ユーラシア研究センター

19世紀日本思想研究会「八木札の辻の歴史について」

八木札の辻交流館 竹田正則

○11月6日(日)

奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 秋季企画展

「蘇我氏を掘る」関連研究講座

奈良県立橿原考古学研究所 1階講堂 竹田正則

2. 八木札の辻交流館

奈良盆地には、盆地を東西に横断する横大路、南北に縦断する上ツ道・中ツ道・下ツ道という幹線道路が古代から存在していた。近世・江戸時代になると、横大路を含む河内から伊勢へと通じる道は初瀬街道もしくは伊勢街道と呼ばれるようになる。また、下ツ道は中街道と呼ばれるようになり、北は奈良を越えて山城まで達し、南は吉野・紀伊方面に通じていた。この2つの街道の交差点は「八木札の辻」と呼ばれ、江戸時代中期以降、伊勢参りや大峯巡礼等で大変な賑わいを見せた。

「八木札の辻」の北東角に立地する、橿原市指定文化財東の平田家(旧旅籠)は木造2階建の建物である。古文書や建築の構造手法等から、18世紀後半～19世紀前半頃に建てられたと考えられる。江戸時代には、「八木・木原屋、嘉右衛門」という屋号の旅籠を営み、大阪から八木を通り、伊勢に至るまでの宿泊所を示した「大阪難波講伊勢道中記御定宿附」という冊子の中で、「浪速講」に属する正規の宿として紹介されている。旅籠を営んでいた当時は1階が接客および主人の居室部分として、2階が宿泊施設として利用されていた。

平成17年に空家となったことで、雨漏り等による老朽化が進行し、修理が必要な状況となった。「八木札の辻」という歴史的立地状況にあり、かつ希少な旅籠建築を現代に伝える建物であったことから、平成22年6月に市文化財に指定し、土地を購入、建物は所有者より寄贈を受けた。

平成22・23年度に修理・整備工事(半解体工事)を行い、平成24年7月から一般公開を開始した。

建物の見学は無料であり、八木の町並みを散策する拠点として活用される施設づくりを進めている。なお、2階の客間6室は勉強会や演奏会等の各種イベントに使用出来るスペースとして有料で貸室を行っている。

また、平成27年10月より1階にギャラリースペースを設け、展示応募者に1ヶ月間無料で貸出を行っている。

入館者及び施設利用者数

開館日数(日)	入館者		小計(人)	貸室		合計(人)
	日本人(人)	外国人(人)		件数(件)	利用者数(人)	
298	8,055	25	8,080	42	670	8,740

札の辻ギャラリー展示

期間	内容
4/1～4/30	内膳善寿会 水彩画展
5/1～5/26	チャリダー大山公一スケッチ展 - 忘却の景色を探して - プラス蜜柑の絵 土岐
8/9～8/23	デコパージュとデコナージュ展
9/1～9/30	大和の仏様(油彩画展)
10/4～10/30	楽しいねん、遊びのアート(手拭・ハンカチ・小風呂敷の絵を利用した掛軸や額)
11/1～11/30	パッチワークキルト展
1/6～1/31	奥吉野、冬景/梅本 隆(写真展)
2/7～2/28	上月ひとみ/お雛様と道祖神の絵画展
3/1～3/31	油彩展 田舎あるある

主催事業

- 愛宕祭期間内における夜間特別開館
平成28年8月23日(火)～25日(木)
期間中の来場者数 1,636名
- 立山展示(畝傍高校書道部・美術部)
平成28年8月23日(火)～25日(木)
- アコースティックライブ(畝傍高等学校フォークソング部)
平成28年8月24日(水)
- 箏こんさーとLive(沢井箏曲院 勝美会)
平成28年8月25日(木)
- 講演会 奈良県の近代和風建築 - 岡本家住宅を中心に - (京都工芸繊維大学 矢ヶ崎善太郎准教授)
平成28年10月15日(土)
来場者数 41名
- 第3回 お伊勢参りウォーク(雨天中止)
平成28年10月29日(土)
申込数 30名
- はたごの音楽会
平成29年1月29日(日)
畝傍高等学校音楽部、吹奏楽部、フォークソング部部員46名による演奏および合唱
来場者数 52名

3. 公開イベント

- 橿原市 市制60周年記念 重要文化財 仏像同時公開
平成28年12月11日(日)

貸室利用状況

	期 間	内 容	貸 室
1	4/2 (土)	箏・尺八の練習	客間 6
2	4/23 (土)	奈良移住計画ワークショップ	客間 2
3	5/1 (日)、7/2 (土)、9/4 (日)、 11/6 (日)、3/5 (日)	読書会 ビブリオバトル	客間 1
4	5/10 (火)	聴覚障害者交流会	客間 5・6
5	5/20 (金)	伝統工芸の学習会	客間 6
6	6/26 (日)、11/19 (土)、12/11 (日)	PHP友の会 読書会	客間 5・6
7	7/1 (金)、16 (土)、8/5 (金)、 18 (木)、30 (火)、9/2 (金)	箏・尺八の練習	客間 5・6
8	7/27 (水)、8/31 (水)	へそ健康講座	客間 1
9	7/31 (日)	愛宕祭 立山作りプレゼンテーション	全室
10	8/25 (木)	奈良大学通信教育部 課外セミナー事前講義	全室
11	9/18 (日)	写真撮影会	客間 4・5
12	10/14 (金)	谷三山を中心とした日本思想の研究会	客間 5
13	10/14 (金)	奈良県国道連絡会 合同研修会	1階全室
14	11/9 (水)、16 (水)、30 (水)、 12/7 (水)、1/25 (水)、2/1 (水)、 8 (水)	インバウンドバスツアー	全室
15	11/20 (日)	友史会 11月例会	全室
16	12/3 (土)	尺八勉強会	客間 1・2
17	12/4 (日)、3/19 (日)	歴史講座	客間 5・6
18	1/7 (土)	天理大学谷山教授に対する、谷三山に関するインタビュー	客間 5
19	2/26 (日)	三曲(箏、三弦)勉強会	客間 1・2・3・4
20	3/10 (金)、3/24 (金)	札の辻界限 散策打合せ	客間 6
21	3/14 (火)	歴史散策研究	客間 6
22	3/23 (木)	奈良大和文化の情報交換	客間 5



写真59 札の辻ギャラリー



写真60 愛宕祭 アコースティックライブ



写真61 畝傍高校 美術部による立山展示



写真62 畝傍高校 書道部による立山展示



写真63 はたごの音楽会



- ・木造十一面観音立像（國分寺・八木町）
 - ・木造大日如来坐像（正蓮寺大日堂・小綱町）
- 来場者数 600名

明板を設置している。

なお、平成28年度は田中宮跡・田中廃寺の説明板1基を設置した。

4. 説明板等の設置・管理

市内に所在する文化財についての普及、啓発を図る目的で説

V. 史跡整備事業

史跡地の公有化

史跡公園整備に向け、史跡指定地の公有化を図っている。

○丸山古墳

所在地：橿原市五条野町・大軽町

概要：越智岡丘陵の東、高取川をはさんで東に続く台地の西端に、前方部を北にして築かれた6世紀後半の大型の前方後円墳である。

墳丘全長約310m、後円部径約150m、前方部幅約210mを測り、県下最大の前方後円墳古墳である。石室の全長は26m以上あり、玄室内に2個の家形石棺があることが判明している。

(1) 公有化基本方針

現在、古墳の前方部の一部は国道169号線によって分断された状態にあり、完全な前方後円墳としての形は整えていないが、墳丘の大部分と東側の周濠や周庭帯は部分的にその姿をとどめている。可能な限り古墳本来の姿を保ちつつ、市民生活の中に活用し、保存と活用を調和させながら将来にわたる本市の象徴の一つとしたい。

(2) 公有地化計画

史跡の現況を考慮し3地区に分類し、地区ごとの計画を定める。なお、今後も調査研究や地域の社会環境の変化に応じて地域区分に修正を加えていくものとする。

【公有化事業】

大軽町 283.43㎡

VI. 指定文化財維持管理事業

1. 草刈

史跡地およびその周辺への雑草の影響を軽減し、また見学者が快適に見学できるように配慮し、年1回以上の草刈を実施している。

【作業箇所】

国指定特別史跡本薬師寺跡、国指定史跡新沢千塚古墳群、国指定史跡丸山古墳、国指定史跡菖蒲池古墳、国指定史跡植山古墳

2. 修理事業

指定文化財修理事業経費の部分補助を行っている。

【解体修理】

国指定重要文化財建造物称念寺本堂（今井町）、県指定彫刻木造大日如来坐像（十市町）、市指定歴史資料今井絵図（今井町）

【部分修理】

国指定重要文化財建造物橿原神宮本殿（久米町）、国指定重

要文化財建造物今西家住宅（今井町）、国指定重要文化財建造物音村家住宅（今井町）

3. 管理事業

指定文化財管理事業経費の部分補助を行っている。

【事業実施箇所】

○国指定重要文化財建造物橿原神宮本殿（久米町）、国指定重要文化財建造物人麿神社本殿（地黄町）、国指定重要文化財建造物瑞花院本堂（飯高町）、国指定重要文化財建造物今西家住宅（今井町）、国指定重要文化財建造物豊田家住宅（今井町）、国指定重要文化財建造物音村家住宅（今井町）、国指定重要文化財建造物河合家住宅（今井町）、国指定重要文化財建造物高木家住宅（今井町）、国指定重要文化財建造物中橋家住宅（今井町）、国指定重要文化財建造物森村家住宅（新賀町）

○県指定建造物旧上田家住宅（丸田家住宅）（今井町）、県指定彫刻木造大日如来坐像（十市町）、県指定彫刻木造聖徳太子（大久保町）

○市指定建造物旧常福寺観音堂付棟札2枚（今井町）、市指定建造物旧常福寺表門（今井町）

また、毎年文化財防火デー前後に合わせて行われる消防署による消防設備の点検を文化財所有者立会いの下、合同で行っている。

VII. だんじり保存事業

市内に現存する優れただんじりを普及・啓発し後世に伝承することを目的とし、だんじりに関する調査、研究並びにだんじりの維持管理事業を行っている。現在、橿原市には保存会により江戸時代末期から明治時代にかけて製作されただんじりが10台（十市町7台・今井町2台・小綱町1台）が保存されている。

【だんじり維持管理】

提灯張替等

平成28（2016）年度 橿原市文化財調査年報

発行日 平成30（2018）年 3月 26日

編集・発行 奈良県橿原市教育委員会
〒634 - 0826 奈良県橿原市川西町858 - 1
TEL 0744 - 22 - 4001（代）

印刷 株式会社 明新社
奈良市南京終町3丁目464番地
TEL 0742 - 63 - 0661
